
ザ・リベンジャーズ 復讐の闘い

須賀 隆太郎

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ザ・リベンジャーズ 復讐の闘い

【Nコード】

N5366B

【作者名】

須賀 隆太郎

【あらすじ】

近未来、月や火星に地球と似て非なる進化をたどった生物を確認した地球。火星政府と友好を結ぼうとした矢先、火星でクーデターが発生し火星政府が滅びる。さらに地球もウイルスを打ち込まれれば滅亡まで追い込まれた中、生き残った青少年たちと火星のテロリストたちの戦いをつづる。果たして彼らの戦いの行方は？

1・全てのはじまり

西暦2035年、旧日本と旧アメリカを中心とする地球連邦政府は火星に地球人類と似たような進化の過程を辿った亜人類を確認。彼らの政府と友好条約を結ぶ方向で話がまとまり、共同文書へのサインの式典を翌日に控えたこの日から物語は動き出す。

各方面への調整を続けていた火星政府の最高責任者、ダッジョ大統領のもとへ慌ただしく駆けつけてくる者がいた。

「大統領、大変です！ 各地の軍事基地がテロリストに乗っ取られました！」

「なんだと！？ そのテロリストどもは一体何が目的だ？」

ダッジョ大統領は冷静に報告してきたフーロス軍務大臣にたずねる。

「はっ、このような犯行声明が文書でつい先ほど届きました」

フーロスはそう言ってダッジョに一枚の紙を渡す。

「どれどれ…… 『我々は地球との友好に反対である。それを押し進める政府に対し今反旗を翻しここにクーデターを起こすことを宣言する。なお、これと同じものを民衆にもバラまいた。民衆の大半は地球との友好を好ましくは思っていない。地球と仲良くしようとする政府はまもなく滅亡するのだ』 だと？ ふざけおつて……」

ダッジョが犯行声明を読み終わった直後、また別の政府高官が執務室に入ってきた。

「大統領、民衆が武装蜂起しました！ まっすぐ大統領公舎へ向かってきます！ 各地の軍事基地をテロリストに乗っ取られた今、軍はまったく機能しない状況です！ 大統領だけでもお逃げください！」

部屋に飛び込んできたパルシェ副大統領はすでに体のあちこちに

切り傷やら銃弾がかすった痕だとかがついており、血がにじんでいた。

「うむ、やむを得ないな」

ダッジョはそう言っただけで部屋を出ようとしたのだが、すでに公舎は民衆に包囲されていて出ることができず、フーロスとパルシェとともに執務室に籠城するしかなかった。

「くっ、例の研究所は無事なのか？」

ダッジョはドアの前にバリケードを築いているフーロスたちにはずねる。

「はい、あの研究所だけは幸いにも守りきることができました」

フーロスがそう答えたとき、公舎内の放送機器を通じて声が流れしてきた。

「やあ、ダッジョ元大統領。ごきげんいかがかな？ 私はテロリストのリーダー、ダステイスだ。今回のクーデターの成功で政府は事実上崩壊、我々が新政府を作ることになるが、その前に二度と地球と友好関係を持つなどと考えないよう、地球をウイルスで攻撃する。その目で地球の人類が滅亡する様子を指をくわえて眺めているんだな」

ダステイスがそう言うと、執務室にあるテレビに今にも発射されるようなミサイルの様子が映し出された。

「こうなった以上事態は一刻を争う。フーロス君、例の実験体は確か5体だけ成功していたものがあつたな？ その中から3体を地球に送ってくれ。3体では足りないかもしれないがこちらの復興も2体は必要だ。彼らなら地球を、そして火星を救えるかもしれない。分の悪い賭けだがそれにすぎるしかもう道はない……」

ダッジョがフーロスにそう指示した直後、ミサイルが発射され、約30分後、地球の太平洋に着弾した。

地球連邦政府は陸地に着弾しなかったことを喜んだが、まだこのミサイル自体は恐怖の幕開けに過ぎなかった。

ミサイル着弾から24時間が過ぎたころ、地球の各地で同時に異

変が起こった。

全世界で20歳以上のヒトが一斉に苦しみだし、治療法も見つからないまま全員息を引き取り、地球の人口は19歳以下の青少年だけになってしまい、地球連邦政府も事実上滅亡した。

地球で20歳以上のヒトが一斉に苦しみだしたのと同じ頃、火星から三つの小型宇宙船が地球に向かって発進した。だが、地球の気圏突入時にそれまで並んで飛んでいた三機がバランスを崩し、三機ともバラバラの場所に落ちていったのだった。

1・全てのはじまり（後書き）

自身初のSFものということと至らない点などあるでしょうがコミはほどほどお願いします。
感想などお待ちしております。

2・神阪讓治・前編（前書き）

2話目にしてようやく主人公登場です。

この第2話から第5話までかけて主役キャラクターたちそれぞれのプロローグを描いていきます。

2・神阪讓治・前編

神阪かみさか 讓治じょうじは、現在高校3年生。人より体格が良いと言うだけで街のチンピラどもからしょっちゅうケンカを売られているが、自身は心優しい青年である。この時代の若者には珍しくニューズもこまめにチェックしてるので、地球と火星の関係の行方もそれなりに知っていた。

その日も学校から帰った後夕方のニュースを見てみると、キャスターがドタバタと慌てた様子で火星でクーデターが起こったこと、そして火星からミサイルが発射され地球の太平洋に着弾したことを早口で伝えていた。

「おいおい、マジかよ……いきなりミサイル打ち込んでくるなんてとんでもない連中だな。でも、こんなバカでかいミサイルが太平洋に着弾して津波が起きないのが不思議だな……」

讓治はテレビを食い入るように見つめながらつぶやいた。

翌日、高校から帰った讓治は自分の目を疑った。普段仕事で夜遅いはずの両親が家にいたこともそうだが、その両親が揃って居間で泡を吹いて倒れていたのである。

「オヤジ！ オフクロ！ どうしたんだ！？ と、とにかく救急車！」

讓治は消防に連絡しようとしたが、

「クソッ、なんで繋がらないんだ！！ しゃーねえ、オヤジ、オフクロ、ちよつと揺れっけど我慢してくれ！」

讓治は電話を諦めると、両親をまとめて背中に背負い、家を飛び出し、近くにある救急病院へ駆け込んだが、さらなる絶望が彼を襲う。

「バ、バカな……なんで人がいないんだよ……」

病院のロビーに着いてみると、職員と思われる人々が受付や廊下

などにやはり泡を吹いて倒れているほかは誰もいなかった。と、そこに背負われている父親が意識を取り戻したようで、

「譲治：おそらく私たちはもう助からない……ただ、この病気は普通じゃないものなのは確かだ……推測でしかないがこの急病は昨日火星から落とされたミサイルに何らかの原因があると思うんだ……そういえばお前は平気なのか……？」

譲治に背負われた状態のまま父親が途切れ途切れに話す。

「ああ、オレは何ともない。だからもうダメだなんて言うなよ、なあ、オヤジ！」

譲治は再び他の病院を求めて走りだそうとしたが、

「譲治、もういい。どうやら母さんはもう一足先に逝ってしまったようだ。私もすぐにお迎えが来るだろう。どこへ向かおうとも状況はいいとは言えない……孫の顔が見れなくて残念……だ……」

父親はそこまで言ったところで譲治の肩に置いていた腕から力が抜け落ちた。

「オヤジ！ オフクロ！ 死ぬなー！！！」

そんな譲治の叫びもむなしく、2人は息を引き取った。

「オヤジ、オフクロ、仇はどんな方法をとつても討つからなら安らかに眠ってくれ……」

譲治はいったん家に帰り、二人の遺体を安置すると、そうつぶやき、少しでも情報を得るため家を飛び出した。

しばらく歩いていくと、空き地にさつき病院から帰るときはなかった奇妙なものが落ち、巨大な穴が開いているのを見つけた。

「なんだありや？ これほどの穴が開いているってことはかなりの高さから墜落したっばいが、誰か乗ってるのか？」

譲治は穴の中に降り、謎の物体にひとつだけあった窓のようなものから中をのぞき込もうとした瞬間、そこが開き、中から地球の人類にはない特徴的な顔つきの女の子が出てきた。

「き、キミは火星の人か？」

讓治がまず質問すると、女の子は「うん」とだけ応えた。

「じゃあもうひとつ、キミは何のために地球へ？ もし地球の現状を知っていて、地球を支配しようという気ならオレは女の子だろうが容赦なく、殴る」

讓治がさらにたずねると、

「違うわ、その逆よ。私は正確に言えば火星の亜人類とも違う、特殊な存在。同じような能力をもった仲間と計3人で地球を守るため、復興させるためにやってきたの」

女の子はあわてて手を振りながらそう話した。

「そうか、とりあえずは敵じゃない……はっ!？」

讓治が安心して女の子に握手を求めようとしたとき、讓治の頬を何かが後ろからかすめた。一瞬なにが起こったかわからなかったが、狙われたと思われる女の子は素早い動きでその場を離れ、讓治の頬をかすめたものには当たらなかった。讓治がすぐに振り向くと、またしても火星の亜人類がいた。今度は銃のような武器を構えている。「なんだデメーら?」

讓治が穴の縁に立っている武器を持ったほうの亜人類をにらみながら問いかける。

「地球人には用はない。我々の目的はそこにいる旧火星政府特殊実験体623号だ」

武器を構えた火星の亜人類のうち一番前にいるリーダーっぽいヤツがそう話した。

「あ? なんだそのなんとか実験体とか言っつのは?」

聞いたことのない単語に讓治が聞き返すと、

「貴様の後ろにいる小娘のことだ。そいつは旧火星政府の研究によって生み出された一種の人造人間^{サイボーグ}だ。新政府は地球を支配するために我々先行隊を送り込んだわけだが、旧政府が送り込んだ実験体がいると邪魔なのでな。ここで消させてもらう。」

リーダーっぽいヤツが詳しく説明したところで、他の連中が穴の縁を取り囲むように散らばった。

「武器も持たない地球人ごときが我らとやりあおうと言っのか？
そこをどけば無理に命まではとらない。さあ、どうする？」

実験体と呼ばれた少女を唯一敵がない部分にかばうように立った譲治に対しリーダーがそう告げる。

「たとえこの命失おうとも、退いちゃいけないときつてもんが男にはあるんだ！！」

譲治はそう叫んだ。と、そのとき後ろにいた少女の体が光り輝いた。

「な、なんだ？」

「見つけた、私の共闘仲間！ パートナとりあえず時間がなからサブ・コンタクト仮契約だ

けでもして一緒に戦ってください！ アイツらを追い払うために！」

2・神阪譲治・前編（後書き）

主人公だけはプロローグが次回まで続きます。

3・神阪譲治・後編

「とりあえずよくわからないが、時間がないってことはわかった。で、どうやればいいんだ？」

譲治は巨大な穴を滑り降り始めている敵を気にしつつ少女にたずねる。

「わたしに触れた状態でわたしの名前を呼ぶだけでOKです。あとはこちらでできますので」

少女はそう言うと言つて敵が迫ってきてると譲治を急かした。

「よし、わかった」

譲治は少女の肩に手を置くと、少女の名前、623号の名を呼んだ。と、そこにかぶせるように、

サブ・コンタクト
「仮契約！」

と少女が叫んだ。

その直後、譲治と少女の体が光に包まれた。あまりのまぶしさに敵も譲治たちを見失っていた。一方光の中では

「あれ、623号はどこいった？」

譲治が目の前から消えた少女を探していると、

「わたしはここにいます。わたしたち実験体は別の人と契約し、同化することで初めて戦闘能力が発揮できるのです。ただし、契約した初期段階ではおよそ半分から6割程度しか能力を使えないことは覚えておいてください。そして、契約して戦うためにはこの形態になって契約者と一体化しなくてはならないのです。行きます！」

光の玉となった少女がそう言って、譲治の体の中に入っていき、光の玉が完全に譲治の中に入りきったところで2人を包んでいた光が収まった。

「まずい！ あの小娘、契約を済ませやがった！ テメーら早くやっちなえ！」

リーダーがそう命令すると、部下たちがハツとしたように再び襲

いかかってきた。

「これで戦えるんだよな？ どうしたらいい？」

讓治がそうつぶやくと、

「わたしは今の状態ならどんな武器にも変形し生成する特殊能力が
つきます。好きな武器をイメージしてみてください」

讓治の頭の中にそんな声が聞こえてきた。

その声を聞いて讓治が武器をイメージすると、右腕のあたりの空
間が歪み、剣が現れた。だが、さっき少女が言ったように能力を完
全に引き出すことができず、剣は剣でも短剣程度の長さしかなかっ
た。

「ちっ、こんなもんか。仕方ねえ、行くぜ！」

讓治は短剣を握ると、手近にいた敵のひとりりを急所である心臓を
一突きにして倒した。

「な、なんだコイツ……ただの地球人じゃないのか？ いくら実験
体が同化してるとはいえこの戦闘力は並じゃない。クソッ、テメー
ら一時撤退だ。だが地球人よ、貴様の顔は覚えたぞ。次に会ったと
きは確実に殺す。さらばだ。」

敵のリーダーはそう話すと、部下とともに消えた。と、讓治と同
化していた少女が元の状態に戻っていく。

「ありがとうございます、助かりました。それで、できればこのま
ま本契約もしてしまいたいんですけど、いいですか？」
オール・コンタクト

少女が讓治にそう頼む。

「今の一件でオレ自身もあいつらに狙われる身になった以上もう他
に道はない。だから本契約も構わないが、その前に火星で何があつ
たのか説明してくれないか？」

讓治がそう言うのと、少女は頷き、話し出した。

「まず、さっき襲ってきたのは火星でクーデターを起こしたテロリ
ストグループ、ハルバート団の下っ端です。彼らハルバート団がク
ーデターを起こしたのが3日前のことで、クーデターと合わせて民
衆も武装蜂起し、旧火星政府は事実上滅びました。その直後にハル

バート団が地球にウイルスの詰まったミサイルを打ち込んだ、と聞いております。わたしたち旧政府特殊実験体は生き残った地球の人々を救い、地球支配を目論むハルバート団を壊滅させるためにやってきたのです。わたしは実験体623号、そして今回ともに地球に来た仲間があと2体、123号と504号がどこかにいるはず。「なるほど、よくわかった。とにかくそのハルバート団とかいうテロリストグループをぶっ潰せばいいわけだな？ んじゃ、さっさと契約しちまうか。っと、その前に、キミの名前なんだが、623号じゃ呼びづらいな。……よし、決めた。ムツミってのはどうだ？」

譲治は事情をすべて理解した上で契約することを改めて決め、ついでに少女を実験体番号にちなんでムツミと呼ぶことを提案すると「ムツミ……わたしの…名前……？」

ムツミはそうつぶやいた。

「いやだったか？」

譲治がそうたずねる。

「ううん、いやじゃない。むしろうれしいです！」

ムツミは笑顔を見せてそう言った。

「それはよかった。オレの名は譲治だが、普段はジョーって呼ばれてる。ムツミもそっちのほうで呼んでくれ。それと、ともに戦う仲間に敬語はなしだぜ」

譲治はムツミにそう話した。

「わかったわ、ジョー」

ムツミは頭の切り替えが早いようで、すぐに敬語なしの会話に切り替えていた。

「それじゃジョー、さっきと同じようにわたしの体に触れて名前を呼んで」

ムツミがそうジョーに告げ、ジョーがムツミの名を呼ぶことにより本契約も完了したのだった。

4・藤堂 聖

藤堂 聖は火星からミサイルが打ち込まれるまでは譲治と同じ高校に通う、譲治の親友だった。人一倍正義感が強く、学校内だろうがそつでなかるうが、弱いものいじめを見るとすぐさま止めに入り、相手を逆に自慢の空手技で叩きのめすといったことを繰り返していた。

だが、火星からミサイルが打ち込まれたことにより地球の大人は絶滅し、学校は閉鎖、譲治や聖たちも互いの安否さえわからなくなってしまうっていた。

「とにかく、一人じゃ現状の把握もままならないし、必要な物も手に入らないから誰かを探るのが先決だな……」

自宅ですでに息を引き取っていた両親をとりあえず布団に寝かせて、聖は家を出た。

しばらく適当に歩き回っていると、聖の耳に少女のような声と、野太い怒鳴り声が聞こえてきた。

（なんだ？ とりあえず行ってみるか……）

気になった聖は声の聞こえた方へ足を向けた。

「死ねえっ！」

とある空き地で主に銃で武装した男の集団が一人の少女を取り囲み、銃を乱射していた。

「くそっ……契約さえすればボクはあんたらなんかには負けないのに……」

男どもが乱射する銃弾を紙一重でかわしながら謎の少女はそつつぶやいた。

「こつちは契約されると困るんだよ。だから契約者の存在しない今のうちに消えてもらう。貴様の仲間の残り2体も我々の仲間が始末しに向かっている。だから諦めてさっさとくたばれえっ……！」

その声に重なるようにさらに銃弾が少女を襲うが、少女はなおもかわしつづける。と、そのとき。

「そこで何やってんだオラアーーッ!!!」

別の男の声が聞こえたかと思つた瞬間、先頭にいたヤツが吹っ飛び、直線上にいた数人を巻き込み、派手に地面に叩きつけられた。

「い、いったい何が……つて、あなたは？」

少女は突然の事態に困惑し、動揺していた。

「なに、ただのおせっかいな通りすがりの者だ。こういうふうは大勢で一人を囲んでいたぶるつてのが許せないのね。加勢しよう」

乱入してきた男、聖がそう少女に告げる。と、聖の不意打ちの飛び蹴りで吹っ飛んだ男どもが起きあがってきた。

「なんだ地球人……死にたいのか？」

直接聖の蹴りを食らった男が鼻血をたらしながら聖にそうたずねる。

「別に自殺願望はもってないよ。だけど、こうして大の男が大勢で一人を取り囲むのは僕の正義感が許せない。だから僕はこの子に加勢する」

聖はそう言うと、少女を立たせながらかばう姿勢をとった。

「見つけた……ボクが契約すべき人……あなた、名前は？」

少女が何かを小声でつぶやいた後、聖にそうたずねた。

「僕の名は聖。藤堂聖だ。君は？」

聖が逆に少女にたずねる。

「ボクは……」

少女が話し始めようとしたとき、

「何も知らない地球人よ。そいつは旧火星政府特殊実験体の数少ない成功体、123号だ。我々新政府からしたら邪魔者以外の何者でもない。そいつらは誰か特定の人物と契約することにより飛躍的に戦闘能力をアップさせることができる。だが今はまだそれがいない状態。今なら簡単に消すことができる。というわけで覚悟してもらおう。」

少女の声を遮るように聖に蹴られた男が少女について説明した。
「なるほどな。でも、だからと言って僕は退かないよ。なぜなら……」

聖がそこで言葉を切り、少女のほうを向く。

「ボクは見つけた。ボクの契約すべき人はこの人だったんだ！」

少女がそう言うとはほぼ同時に聖が少女の名前、123号の名を叫ぶ。

オールド・コンタクト
「本契約！」

123号がそう叫び、光の玉に変化し聖と一体化していく。

「ちつ……なんでこんなタイミングよく契約者が現れるんだよ……」

テメーら、さつさとやっちまえ！」

その声にハツとしたように、他の数人が銃を構えて飛びかかっていったが、直後に全員吹っ飛ばされた。

砂煙が収まると、両手にグローブをはめ、腕には金属製のアームガードを装着した聖が立っていた。

「どうする？ まだ続ける？ それでも僕は一向に構わないけど？」

聖が余裕の笑みを浮かべ半分以上倒れている男どもに告げる。

「止むを得ん、今日のところは撤退しよう。ときに地球人、貴様の名はなんという？」

最初に聖の蹴りを受けた男が去り際にそうたずねる。

「聖、藤堂聖だ。」

「ヒジリか、覚えておくぞ。そしてかならず123号もろとも殺す。それまでつかの間の平和を楽しむがいい。さらばだ。」

男はそう言うと、倒れている男どもとともにその場から消えた。

123号は聖との一体化状態を解き、もとの状態に戻った。

「とりあえずこれからどうするの？」

聖がそう123号にたずねる。

「さつき戦ったヤツらは火星でクーデターを起こしたテロリストグループ、ハルバート団の下っ端。地球を支配するために動いている

わ。私やあと2体いる仲間はそれを阻止するために旧政府から派遣されたの。聖さんさえよければ、ハルバート団の本隊をたたきつづきたいのだけど……」

123号はそう答える。

「そっか。僕も手伝うよ。別に君と契約したからってわけじゃなく、僕自身の意思だから。あと、君の名前、123号だと呼びづらいから、ヒフミって呼ぼうと思うんだけど、どうかな？それともうひとつ、僕の親友がよく言ってたことだけど、仲間同士に敬語はなし。いい？」

聖はそう話した。

「ヒフミ……わかったわ。改めてよろしく、聖」

123号改めヒフミと聖の戦いもまたここに始まった。

5・牧野 翔子（前書き）

これがメインキャラ最後の一人です。

張り切りすぎて主人公の譲治並み、あるいはそれ以上に長いですが、でも分けられなかったのでもうなりました。

5・牧野 翔子

牧野まきの 翔子しょうこと譲治はいわゆる幼なじみという関係で、かれこれ10年以上仲のいい友達関係を続けてきていた。

だが、火星からミサイルが打ち込まれたことにより彼女もまた家族を失い、学校の友人たちの消息すらわからない状態になっていた。「火星に復讐するまでは絶対に死ねない……」だけどとりあえず情報と仲間を集めないと戦えるわけもないわね」

翔子は自分の部屋から何かを懐に入れると、家を後にした。

「ここまでひどいなんて……誰か生きてる人はいないのかしら……」
翔子は街中を歩きながら泣きそうになっていた。道端には出かける途中で倒れた人々の息絶えた姿が無数に転がっていた。それでもめげずに歩いていくと、建物の陰に人影が入っていくのが見えた。

「生きてる人、いた……待って！」

翔子は慌ててその人影を追って建物の陰に走り寄る。と、人影の正体が火星人だということに気づいた翔子は引き返そうとしたが時すでに遅し、あつという間に取り囲まれてしまった。

「ちようどいいところにしたな。おい、女。このあたりで他に男を見なかったか？」

翔子を取り囲んだ男どものひとりがそう問いかける。

「し、知らないわよ。生きてる人に会ったのはあなたたちが最初だもの。で、あなたたちはいったい何なの？」

突然の出来事に驚いて動揺しながらも翔子は強気にそう答え、逆にたずねる。

「ちっ、こっちには来てないか。地球を守るためにヤツらは派遣さ

れてるといふことは、だ……」

男どもは翔子の質問には答えず、何かを考えてるようだった。

「よし、コイツを利用してもらおう」

何かを思いついた男は、あっという間に翔子を拘束してしまった。あまりの早技に翔子は悲鳴をあげる暇さえないほどであった。翔子を拘束した男はそのまま大通りに出て、おもむろに叫んだ。

「聞こえてるか、実験体よ！ 我々は地球人の女を人質にとらせてもらった！ 30分以内に出てこなければこの女は殺す！ 地球人を守りなければさっさと出てこいコラア！」

その言葉に真っ先に反応したのは翔子だった。

「ちよつと、いきなり縛り上げてなんのつもりよ！？ しかも実験体だとかわけわかんないこと言っただけでさっさとコレ解いてよ！」

翔子はそう言いながらじたばたと暴れたが、男どもが無言で銃を取り出したので諦めて黙るしかなかった。

「諦めな、お嬢さん。この時代に生まれたことを恨むしかないだろうな。ん？」

男どものひとりがそうたしなめたそのとき、翔子たちがいる大通りを見渡せる家の屋根の上に人影が現れた。逆光になっていて顔は見えなかったが、どうやら男どもが探していた人物のようだった。

「ようやく出てきたな、実験体504号め。ここまで降りてこいコラア！」

男どもは人質にした翔子に銃を突きつけながら屋根の上にいる人物にそう怒鳴る。

「いいだろう。ただし、俺が降りると同時にその人を解放してくれ」
屋根の上にいる人物は男のようで、自分が降りる交換条件に翔子の解放を要求した。

「よし、こちらとしても貴様が見つければ地球人の女などに用はない」

男はそう言うと翔子を縛っていたロープを解いた。

「これで思いつきりやれるぜ。ありがとよ」

屋根の上の実験体と呼ばれた謎の男はそう言う勢いよく屋根から飛び降りると、その落下の力を利用して男どもにまとめて蹴りを食らわせた。「ぐはっ」という声をあげ吹っ飛ばす男どもとただそれを呆然と眺める翔子だったが、

「くそ、さすがに実験体最強の戦闘能力だけあるぜ。契約者がいない状態でこれだけやるとはな……だがそれもここまでだ。来い、“ビガー”！」

起き上がった男がそう叫ぶと、遠くのほうから地鳴りが聞こえ始め、家々を踏み潰してソイツは現れた。

その足は軽自動車より少し大きいくらい、高さはビルの5階分程度はあるつかという巨大なロボットだった。

「ロ、ロボット……！？　こんなバカでかいの、どうすんのよ……！？　……って、あれ？」

「ふーむ……こいつはさすがに契約者のいない状態では厳しいか……おや？」

巨大ロボットが接近してくるのを見て腰を抜かしそうになっている翔子と、冷静に状況を分析している504号が同時に何かに気づいた。

「なんか光ってる……これ、なんなの……？」

「まさか、それは契約の光……お嬢さん、今は事情を説明している時間がない、何も言わずに俺と一緒に戦ってくれないか？」

自らの体内から発せられる不思議な光に翔子はただそれを眺め、そして504号はその光が何なのか知っているようで、翔子にそう交渉を持ちかけた。

「どういうこと？　あと、私の名前は翔子ね、お嬢さんじゃなくて翔子は何のことかわからないといった風に聞き返す。

「わかった、翔子。詳しい説明は今省くが、どうやら君は俺、いや俺だけじゃなくこの地球にとっての救世主になるようだ。俺と君の力をあわせればあのロボットくらい難なく倒せるだろう。すまないがこの戦いだけでもいい、力を貸して欲しい」

504号はそう翔子に頼み込んだ。

「どうやらもう迷ってる時間はないみたいね。いいわ、その話に賭けてみましょう。どうすればいいの？」

翔子はもうすぐそこまで接近してきている巨大ロボット“ビガー”を見てそう判断し、504号にそうたずねる。

「なに、方法は簡単だ。俺の肩辺りに手を置いて、俺の名前 504号と叫んでくれればいい。それだけで契約は完了する。準備はいいか？」

504号は方法を説明すると、翔子が名を呼び、二人の身体が光に包まれた。

「まずい、実験体とあのガキどこへ行きやがった！？ “ビガー”、その辺一帯をまとめて踏み潰せ！」

その命を受けて“ビガー”がしらみつぶしに近辺を踏みならしていく。と、そのとき何かが高速で“ビガー”に直撃して吹っ飛び、たまたま吹っ飛んだ着地点にいた敵の雑魚戦闘員数名をプチッと押しつぶした。

「いったい何が起こった！？ “ビガー”が吹っ飛ぶなんて……」

リーダーがそう言って土煙の中をみやると、504号が一体化し、鎖の先に鉄球をつけた武器を持った翔子が出てきた。

「こ、契約だと！？ さすがに契約者の力も合わさると強いな……」

“ビガー”が吹っ飛ぶわけだぜ……だが、その程度で“ビガー”は倒せんぞ！」

多少うるたえつつもリーダーがそう言ったそのとき、後ろのほうでのそりと“ビガー”が起き上がった。

「ちっ、まだやるつもりなの？」

鉄球を構えながら翔子が敵に問う。

「当たり前だ と言いたいところだが、どうやらこちらの秘密兵器である“ビガー”に今の打撃で異状が出たらしい。今日のところは撤退しよう。だが貴様らがこの先もこの惑星を救うつもりならば必ずまた出会っだろう。次に会うときに貴様らにとって最期の時だ。」

さらばだ！」

リーダーはそう言うと、生き残ってる部下と壊れかけた“ビガー”を連れてその場から消えた。

「ふう、とりあえず勝ったわね。でもいつたい今の火星で何が起きているの？ 地球連邦と友好条約を結ぶはずじゃなかったのかしら？」

504号との一体化状態を解き、一息ついた翔子はそうたずねていた。

「地球政府と友好条約を結ぶはずだった火星政府はテロリストによるクーデターで滅び、テロリストはこの地球を征服するためミサイルを撃ち込み、男女問わず成人しているものを絶滅させた。俺は旧火星政府が最後の力を振り絞って地球を守るために派遣した3体の特殊実験体のうちの1体だ。さつき戦ったときのように、他の人間と契約することで数倍もの戦闘能力を得ることができるといっわけだ。ここまでは大丈夫か？」

504号がここ数日に起こったことを翔子に伝える。

「ええ、大体は大丈夫よ。それで、さっきのあいつらがそのテロリストなの？」

翔子がそうたずねると、

「ああ、そうだ。ただ今日戦ったのはやつらハルバート団の下っ端に過ぎない。敵の上層部は今日のヤツよりはるかに強い。俺の仲間があと2体ともに来ていて、全員が契約者コントラクターを見つけていればどうにかまとともに戦えるってくらいだろう。ほぼ無関係の君にいきなりこんなことを言うのもどうかと思うが、それを承知で頼みたい。俺と契約して地球と火星を救うために戦ってくれないか？」

504号がそう言って頭を下げる。

「いいわよ。両親を失ってもう私には何も失うものなんてない。だったらこの事態を引き起こしたヤツをぶっ飛ばすまでのこと。やりましょう、ゴウシー！」

翔子があっさり了解すると、

「ありがとう、でもその“ゴウシ”ってのはなんだ？」

504号が翔子にそうたずねる。

「あなたの名前よ。504号じゃ呼びづらいしね。気に入らないなら何か他の名前を考えるけど？」

翔子はそう答えた。

「名前か。実験体の番号以外で呼ばれたのは初めてのことだったからちょっととまどったが、ありがたくその名前を使わせてもらうよ。504号改めゴウシはうれしそうにそう言い、翔子との契約を済ませた。

「まずはゴウシの仲間を探さないとね……私の友達を探すことから始めましょう。そこから情報を集めればきっとすぐに見つかるわよ。でもどこから探そう……？」

悩みつつも、翔子とゴウシは歩き出した。仲間を、探すために……

5・牧野 翔子（後書き）

メインキャラが出揃い、物語は始まる。

彼ら3人が出会うとき、どんな物語がつむがれるのか？

それは次回のお楽しみということだ。

6・合流

「さて、これからどうするんだ？」

オイル・コンタクト
本契約を済ませた讓治がムツミにたずねる。

「いつ次の敵が襲ってくるかわからないからなるべく早く他の2体の仲間と合流したいわ。無事だといいいんだけど……」

ムツミは心配そうな表情でそう話した。

「わかった。だけど他の仲間は近くにいますか？」

讓治はふと気になってムツミにそう問いかける。

「地球の大気圏に突入した後、着陸の直前にバラバラに落っこちたからこの近辺にいると思うけど、正確な場所はわからないわ」

ため息をつきながらムツミはそう首を振った。

「そうか。じゃあとりあえず誰か他の生き残りを探そう。ムツミたちが地球を救うためにやってきたなら、地球人の生き残りの誰かが目撃してるかもしれないしな」

讓治はそう言ってムツミとともに歩き出した。

そのころ、讓治たちのいる場所から数キロ離れた場所では

「うーん、ここも全滅か……たしかこの地区には僕の同級生がいたはずなんだけど……」

聖が生き残りの人を探して歩き回っていた。しかし、ウイルスに倒れた大人たちが見つかるだけで、子供の姿がどこにもいなかった。

「このあたりにはもう人の気配を感じないよ。次に行こう、聖」

ヒフミが聖の袖を引っ張ってそう話す。

「そっか、じゃあもつと街の中心部へ向かってみようか」

聖はそう言ってヒフミを連れて歩き出した。

同時刻、街の北はずれ

「いないわね……生き残った人も、ゴウシの仲間も……」

翔子が塀に寄りかかりつつそうつぶやく。

「シヨールコ、まだ諦めるには早い。今回来た3体の中では俺が一番戦闘向きだが他の2体だって弱いわけじゃない。きつと他の地球人を味方につけて生き延びているさ。さあ、早く探しに行こう」

ゴウシはそう言って翔子を励ます。

「そうね。成人してる人だけがやられたんだから同級生たちは生きてるはず。街の中心部へ行ってみましようか」

翔子はそう言うのと寄りかかっていた塀から勢いよく身を離し、ゴウシとともに歩き出した。

街の中心部に程近い場所に譲治たちの通っていた高校はある。譲治とムツミがその近くまで来たとき、不意にムツミが譲治を止めた。「ムツミ、どうした？」

譲治が不思議そうにそうたずねると、

「あそこの細い道とそっちのやや大きい道に人の気配を感じるわ。それぞれ2つずつ。一応警戒しておこうと思って」

ムツミが真剣な表情で譲治に注意を促す。譲治はいつでもムツミと一体化して戦えるように構えていた。

「来る！」

ムツミがそう叫んだ瞬間、道から出てきたのは

「聖！ それと、翔子じゃないか！」

警戒態勢を解いて譲治がそう叫ぶ。聖と翔子もお互いに気づいたようで、警戒態勢を解いていた。

「よかった、みんな無事だったか。でもやっぱり親は……」

譲治はそう言いかけて肩を落とす。

「あれ？ そういやオレの連れが人の気配が二つずつって言ったけど、2人とも誰か他に連れでもいるのか？」

譲治はさつきムツミが言ったことを思い出して2人にそうたずねる。

「え、ああ、火星の……」

聖がそう言いかけたそのとき。

「123号、623号！ 無事だったか！」

「ん、504号じゃないの。そつちには123号もいるし、これで全員集合ね！」

「504号に623号がここにいるってことはみんな敵襲を切り抜けたのね。一緒にいる地球人が契約者コントラクターなの？」

3体の実験体が偶然にも揃い、いろいろ話していた。

「そつよ。どうやらみんな契約者コントラクターを見つけたのね。わたしたち3人が集まればなんとかなるよね」

ムツミがそう話していた。

「まさか2人がオレと同じように戦おうとしてるなんて知らなかったな。それぞれの共闘者パートナーがあいつた状態だし、これからはともに戦おうと思うんだが、どうだろうか？」

譲治は聖と翔子にそう持ちかけた。それぞれのパートナーはそれぞれがもらった名前をお互いに教えあつたりして、まだ再会の喜びに浸っていた。

「もちろん構わないよ。むしろ彼らのためにもそうすべきだろうね」

「いいわ。というか3人が力をあわせないと敵の大將は倒せないみたいだしね」

聖も翔子もあつさり頷いた。

「あ、そつだ。2人とも他に生き残ってる人を見てないか？」

譲治が思い出したようにたずねる。

「いや、見てないよ。その様子だとそつちもいなかったんだ」

聖がそう答え、譲治の表情からそう推測した。

「私は北はずれから来たけど見事に誰もいなかったわ。他の生き残りなんているのかしら？」

翔子がそつ首を傾げたそのとき、街の防災無線が流れるスピーカ

ーを通じて声が聞こえてきた。

『あー、我々はハルバート団地球侵略班だ。実験体とそのパートナの地球人どもに告ぐ。この街の貴様ら以外の生き残りは全員人質にさせてもらった。解放してほしくばこの街の外れにある放送塔の最上階まで来い。待っているぞ』

言いたいことだけ言つとスピーカーのスイッチが切れる、ブツン、という音が響いた。

「どつりで誰もいないわけだ。これ以上オレたちの街で好き勝手にさせるわけにはいかねえ、追っ払いに行くか」

譲治はそう言つて聖や翔子とともに街はずれの放送塔を目指すのだった。

7・そのころの火星と人質奪還戦始動

讓治たちが合流し、人質にされた生き残りを助け出すために街はずれの放送塔を目指している頃、火星では……

「ダッジヨ大統領、もうすぐそこまでハルバート団の本隊が迫ってきてバリケードも限界です！ どうしましょう!?」

ダッジヨ大統領、パルシェ副大統領、フーロス軍務大臣の3人がバリケードを壊されまいと必死に耐え、籠城を続けていた。

「フーロス君、いまはとにかく耐えるときだ」

ダッジヨがそう励ましたそのとき、大統領の執務机がガタガタ動いて床に穴が開いた。そこから出てきたのは……

「大統領、ご無事でしたか！」

「おお、カルー研究部長か！ 無事に実験体は地球に着いたか？」

ダッジヨは床下から現れた男をカルーと呼んでそうたずねた。

「ええ、3体ともすでに地球に到達し、コントラクター契約者も見つけたようですよ。カルーはそう話した。」

「っと、そのような話はあとにして早く脱出してください。どうぞやらハルバート団の連中はこの公舎ごと破壊する準備を進めているようです。そのためさつきまで取り囲んでいたヤツらが引き上げていくのが見えました。今私が出てきた穴を使えば安全に脱出することが可能ですので」

カルーは3人にそう告げると床下の穴に潜っていった。

「よし、脱出だ。おそらくこの機を逃したら我々は生き残れまい。」

行こう、2人とも」

「はっ」

こうしてダッジヨたちは包囲された大統領公舎から無事に脱出することができた。

ダッジヨたちが脱出してから数十分後、公舎はハルバート団が仕掛けた爆弾により崩壊した。

ハルバート団総帥・ダステイスはそれを確認すると、部下にこう告げた。

「これで邪魔者はいなくなつたな。私は今ここに共和制を廃止し私を皇帝とするハルバート帝国の建国を宣言する！」

はたまたまそのころ、ハルバート団地球侵略班は……

「オルネス、エパロフ、ダカルラーテ。お前らは何をやつてるんだ？ 3人とも実験体と交戦してるのに始末できずに敗走してくるとは……」

最上階で讓治たちに向けて放送を流していた男が部下を責めていた。

「さつき生き残りを人質にとつたと放送を流したからやつらはじきにここに来るだろう。ダカルラーテは塔の入り口、エパロフは3階、オルネスは5階で敵を迎え討て。本隊から連絡が来たがどうやら本星の制圧は完了し、ハルバート帝国を建国したらしい。我々にも早く地球を制圧しろとせっついてきてる。今回失敗したらもうチャンスはないと思え。いいな？」

「はっ！ 了解しました、ワルブズ殿！」

オルネスたちは敬礼をすると各所へ散らばっていった。

「おつ、あれだな。街はずれの放送塔つてのは」

讓治が遠くに見える高い塔を指してそう言った。

「どうやらそうみたいだね。あれ？その前になんかもつひとつデカイ塔みたいなものが見えるけど、なんだ？」

聖が少し警戒してそうつぶやく。

「あれは……、ビガー！？」

翔子がそれを見て驚いたようにそう言った。

「翔子、知ってるのか？」

讓治が翔子にたずねる。

「ええ、私とゴウシが出会った巨大ロボットよ。この鉄球で撃退したんだけど、また会うとはね……」

翔子はそう言ってふところから鎖つきの鉄球を取り出す。

「そんなデカイ鉄球をどこに収納してたかはあえて聞かないでおくことにして、その程度であれば勝てるか？」

聖が鉄球にツッコミを入れつつ、勝算があるかたずねる。

「十分勝てるわ。さあ、行きましようか」

翔子は鉄球を肩にかけると塔に向けて歩き出した。

「来たな、実験体504号と地球人の女め……先日は不覚を取ったが今日はそうはいかん！来い、'ビガー'マーク2！」

譲治たちが塔の入り口に近づいてくるのを待っていたかのようにダカルラーテがそう叫び、装甲が強化され、さらに巨大化したロボットが塔の裏側から姿を見せた。前回と違うのは大きさだけではなく、ダカルラーテ自ら操縦席に座っていることだった。

「うげ……塔とロボットの大きさを逆に見てたのか……」

あまりの大きさに譲治たちは思わずうめいていた。

「とにかくやるしかないわ。行くわよ、ゴウシ！」

「OK！」

ゴウシは短く返事すると、光の玉に変化し翔子と一体化した。

「さあ、3人まとめてこのダカルラーテが始末してやろう！」

「はあ？ 何言ってるの？ アンタの相手は私一人で十分よ。ジヨ

ーと聖は先に行行って。コイツを片づけたらすぐに追いかけるから」

翔子はそう言うとダカルラーテに向けて力任せに鉄球を振り回した。

「翔子、ここは任せませ！ 先に行く！」

行く手をふさごうとするダカルラーテを翔子が引きつけている間に譲治たちは塔の中に突入するのだった。

8・翔子vsダカルラーテ、そして……

塔に入って入り口の扉を閉めたところで譲治と聖は一息ついていた。

「あゝあ……あのダカルラーテってヤツ、死んだかもな……」

譲治がそう切り出した。

「たしかに牧野は女子の中でもとびつきりケンカが強いけど、いくらなんでもあのデカさはヤバイだろ。今からでも戻って加勢したほうがよくないか？」

聖がそう提案して扉を開けようとするが、譲治がそれを押しとどめた。

「むしろオレたちが出て行くほうが邪魔になるだろう。シヨーコが大丈夫って言ったんなら大丈夫、アイツはすぐに追いついてくるさ。さあ、この階は誰もいないようだし、上に行こうぜ！」

譲治はそう言うのと階段を上がっていき、聖もあとに続いていった。

「強化された‘ビガー’、マーク2とこのダカルラーテをたった一人で倒すだと？ なめたマネを……」

‘ビガー’、マーク2に乗ったダカルラーテが忌々しげにつぶやく。「ふふん、一度私に負けてるヤツが何を言っても負け犬の遠吠えにしか聞こえないわ。ちよつと図体が大きくなつたからって勝てると思ってるの？」

それに対し、翔子は勝ち誇った表情でそう言い放った。

「このクソガキ、調子に乗るんじゃ、ねえ！」

今の翔子の一言で完全にキレたダカルラーテが‘ビガー’、マーク2を操作して翔子に殴りかかってきた。

「ったく……これだから単細胞って嫌いなものよ……もう、邪魔！」

翔子はブツブツと文句を言いながら肩にかけてた鉄球を振り回し

た。ドズンともものすごい音をたてて鉄球は、'ビガー'、マーク2のすぐ目の前の地面にめり込んだ。

「ふん、どんな力も相手に当たらなければ何の意味もないわ！ 今度はこちらから行くぞ！ 食らえ、'ビガー'、ミサイル！」

ダカルラーテは背中に冷や汗が流れるのを感じながらも強気にその叫び、反撃のミサイルを背中から発射する。

「あら、デカくなっただけじゃなかったの。でも、こんなチャチなミサイルなんかで私を倒せると思わないことね！」

翔子はそう言うのと鉄球の鎖の真ん中を握り、両側についた鉄球のうち片方を自分の眼前で回転させ始めた。小型ミサイルはキン、という音をたててはじき返され、撃ったダカルラーテ自身に直撃、激しい土煙が上がっていた。

「バ、バカな……いくら小型とはいえミサイルをはじく生身の人間なんて……ああ、今は実験体が一体化してるからこそ可能なのかもしれないな」

防衛して小型ミサイルの威力を大幅に減らしたダカルラーテが土煙の中からほぼ無傷で出てきた。

「今まではこの鉄球を出すこと以外でゴウシの力は使ってないわ。でも、せっかくだしここからは現時点で出せる最大限で戦ってあげる」

翔子が相変わらずの薄い笑みを浮かべた直後、翔子の全身が光り輝いた。

「しょせんハツタリだろう！」

ダカルラーテはそう叫びながら翔子を押しつぶさんと迫ってくる。それに対して翔子は余裕の表情を見せ、

「星に、なれー！ー！ー！ー！」

と叫びながら勢いに任せて鉄球を振り回した。鉄球はゴスツ、と鈍い音をたてて、'ビガー'、マーク2に当たり、その衝撃で、'ビガー'、マーク2はダカルラーテを乗せたままはるか空の向こうまで吹っ飛び、星になった。

「さて、さつさとジョーたちに追いつかないとね」
そう言つと翔子は塔に入つていった。

「なんだ、ここ？ 雑魚しかいないの？」

2階で雑魚戦闘員を蹴散らしながら聖がつぶやく。

「こ、このバケモノどもめ……これでも我らはかなりの戦闘訓練を積んだエリートクラスなんだぞ……」

聖が雑魚呼ばわりした敵の1人が息も絶え絶えにそう話す。

「これ以上やるつもりなら多分てめーら死ぬぞ。ここで降伏すればそのまま放置して先に進む。おとなしく寝てやがれ」

讓治がそう警告する。

「そこまで言わなくてももう我らは戦えぬ。体力はあるが勝ち目のなさに戦意を失った。次の階へ進むといい。だが次の3階では今回の侵略班の幹部クラスが待ちかまえている。お前らはそこで終わるだ……って、もういないし……」

長々と話し続けた雑魚を無視して讓治たちは階段を上がついていった。

「来たか……待っていたぜ、ヒジリ……」

階段を上がりきるなりそんな声が聞こえてきた。

「お、お前は……誰だっけ？」

階段を上がつてすぐに見えた敵に名前を呼ばれた聖は敵の顔を見たが誰だかわからなかった。

「そうか、名前を名乗ってなかったな。俺の名はエパロフ。貴様らにはこの3階で死んでもらう。……ちっ、どうやらダカルラーテがやられたようだな」

「ジョー！ 聖！」

エパロフが名前を名乗り中ボスにありがちなセリフを吐いてるところに翔子が階段を上がつてきた。

「翔子！ 大丈夫だったか？」

譲治がそうたずねる。

「楽勝！ あんなデカいだけのロボットなんて私の敵じゃないわ」
翔子がVサインで応える。

「どうやら3人そろったようだな。3人まとめて始末してやる、かかってくるがいい」

エパロフがそう挑発してきた。

「バカも休み休み言え。お前の相手は僕だ。ジョーと牧野は先に行つてくれ」

聖が今度は自分の出番とばかりにそう言つて先制攻撃をしかけた。

「聖、ここは任せていいか？」

譲治がそうたずねる。

「ああ、すぐに追いつく。おそらく上の階にはジョーが戦つた相手
が待ちかまえているはず。そこまで体力温存しとけ」

聖は譲治たちを先に行かせるためにエパロフに連続して攻撃を繰り出した。

「じゃあ、また後でな！」

譲治たちは聖にそう叫ぶと4階に上がっていった。

「さあ、改めて始めようか？」

いったんエパロフと間合いをとつて聖がそう言った。

「ヒジリよ、1人で戦うと言つたこと、後悔させてくれる！」

8 ・翔子vsダカルラーテ、そして……（後書き）

ダカルラーテの乗った巨大ロボットをあっさり撃破した翔子。そして3階では聖vsエパロフの決戦が始まるうとしていた

9・聖 vs エパロフ in 3階

「我が名はハルバート団地球侵略班中隊長・エパロフ！ 行くぞ、ヒジリ！」

エパロフはそう叫ぶと、今まで触りもしなかった背中の槍と斧が合わさったような武器を手にとった。

「なんだか妙な形の武器を使うな……前回戦ったときは持ってなかったようだが、今度は本気で来るんだな。相手にとって不足なし！ 行くぜっ！」

聖はヒフミの能力で鋼鉄の手甲を作り出し、装着すると、勢いよく床を蹴ってエパロフとの間合いを詰めていく。

「もらったあ！」

聖は一気にエパロフの懐に潜り込むと同時に攻撃を仕掛けようとした。しかし、

アーマードチェンジ
「鎧変化！」

ガキーン！

エパロフがヒットの寸前に何かを叫び、聖の攻撃はエパロフの身体ではなく金属をとらえていた。

「な、なんだ！？」

聖は何が起こったかわからず、いったん引いて間合いをとった。

さっきまで防具らしきものを何もつけていなかったエパロフだったが、いつの間にか全身鋼鉄鎧フルアーマーで覆われていた。

「どうだ、驚いたか。我のこの武器は鎧変化アーマードチェンジの声により武器の中に収納されたこの防具が現れるのだ。しかもコイツは地球にはない金属でできていて並の攻撃じゃ傷一つつけられない優れものだ。さあ、ヒジリよ、どうする？」

エパロフが勝ち誇ったような表情でヒジリにそう問いかける。

「なるほどね。でもまだ僕は負けちゃいないよ。さあ、第2ラウンドと行こうじゃないか！」

聖は勝ち誇った表情のエパロフにひとつ相槌をうつと、再び床を蹴ってエパロフとの距離を詰めていく。

「もう貴様の攻撃は通用しないとわかっただろう！ 何度やっても無駄だ！ 我が槍にして我らハルバート団の象徴・ハルバードの餌食になるがいい！」

エパロフは向かってくる聖に向けてハルバードの斧の部分の刃を振るう。

「おっと、防具のないこっちは当たったら終わりだな」

聖は冷静にエパロフの攻撃を避けると、身軽にエパロフの背後を取り、腰の入った正拳突きを食らわせた。

「ぐっ！？」

不意打ちに一瞬エパロフの体勢が崩れたものの、大ダメージとまでは行かなかった。

「やっぱりね。エパロフ、その鎧には弱点がある。それもかなり致命的な、ね。このままだと間違いなく僕が勝つ、そしてお前は死ぬだろう。降伏するなら今のうちだよ？」

今の攻撃で聖は何か気づいたらしく、エパロフに降伏勧告をしていた。

「はん、いきなり何を言い出すかと思えば降伏しろだと？ 我にダメージも与えられないのか？ 寝言は寝て言え！」

エパロフは聖の勧告を突っぱねると、ハルバードを構え、ドストと床を振動させながら聖に向かってきた。

「仕方ない……まずは弱点その1」

そう言いながら聖はエパロフの武器の間合いの中に自ら飛び込み武器を封じると、なおも向かってくるエパロフの足を引っ掛け、派手に転ばした。

「ぐはっ！？」

スピードこそなかったものの、床が振動するほど重い鎧をつけているせいで床に叩きつけられたことによる衝撃は凄まじいものがあった。

「これが弱点その1だ。防御面だけに特化したその鎧はスピードがない。身軽なこつちにはいいのだよ。そして、弱点その2。これはもう時間の問題だな」

聖がそう告げた瞬間、3階の床がエパロフを中心にひび割れ、直後に穴が空いてエパロフは下の階に落下した。

「この放送塔、だいぶ老朽化が進んでるんだよな。あんな重いものつけてたら床が持たない……もう聞こえてないか」

聖が穴の縁から下をのぞき込むと、エパロフは2階の床も突き破り、1階の床に頭からめり込んで絶命していた。

「よし、ちよつと時間かかりすぎちゃったが、ジョーたちに追いつかないと」

聖はエパロフが穴に落ちるときに手放して落としたハルバードを墓標がわりに床に突き立てると、階段を駆け足で上がっていった。

9・聖vsエパロフ in 3階(後書き)

策略(?)で敵を倒した聖。

次は譲治の番!さてどうなる!?

10・讓治vsオルネス in 5階&そして最上階へ

聖vsエパロフに決着がついた瞬間、すなわちエパロフが自滅して階下に落下したとき、讓治と翔子は4階の雑魚戦闘員を蹴散らしていた。

「なんだ今の？ 下の階でもものすごい音が聞こえたぞ!？」

あらかた敵を倒したところに大きな音が聞こえてきたので讓治も翔子も顔を見合わせていた。

と、そのとき。

「ジョー、牧野、下は片づいたぜ」

聖がそんな声とともに階段を上がってきた。

「聖、無事だったか。今のデカい音はなんだったんだ?」

讓治がハイタッチで聖を迎えると、ついさつき聞こえた音についてたずねた。

「ああ、あれは敵が着けてた鎧が重すぎて床が壊れた音。それで自滅してくれたばってくれた」

聖は笑いながら説明した。

「マヌケなヤツもいるのね。とりあえず先へ進みましょう」

翔子がそう言って3人は5階へ上がっていった。

「ほう、ダカルラーテ、エパロフ兩名を撃破してきたか。どうやら貴様らを止めるのはこのオルネスの役目らしいな」

5階に上がってきた讓治たちを待っていたのは、これまでのことから予想したとおり讓治が前に出会った敵だった。

「俺はハルバート団地球侵略班中隊長、斧アックスナイト戦士オルネス! 中隊長最後のひとりとして、これ以上先には進ません!」

オルネスと名乗った敵は背中と腰にベルトで固定していた斧を外し、構えた。

「さて、ここはオレの出番だな。2人は先に行っててくれ。ムツミ、行くぞ！」

讓治は聖たちにそう声をかけると、ムツミと一体化し、剣を生成した。

「ちっ、まだ完璧には具現化できないか」

讓治はちよつと前に本で見てかつこいいと思って覚えていた剣・青龍刀をイメージしたはずだった。

だが、生成された剣は青龍刀とは似ても似つかない短めの剣だった。

（これは、青龍刀じゃなくてバゼラードって剣ね……イメージがズレたのかな）

一体化して讓治の中にいるムツミがそうつぶやいた。

「地球人よ、1人で俺を倒せると思うな！ 全員まとめてかかってこい！」

オルネスは3人にそう怒鳴った。

「勘違いするなよ、てめえの相手はオレひとりで十分だ。それとオレの名は地球人じゃなくて讓治だ」

讓治がオルネスと聖たちの間に立つて時間を稼いでる間に、聖たちは6階に続く階段を上がっていった。

「あくまで1人で戦うつもりか。まあ、いいだろう。ジョウジと言ったか、貴様をしとめてから残りを片づけければいい話だ。行くぞ！
アーマードチェンジ
鎧変化！」

オルネスがそう叫んだ瞬間、斧の刃の片方が全身鎧フルアーマーに変化しオルネスに装着された。

「コイツはエパロフとよく似た技だが、自己流に改良を加えて軽量化に成功してる。おそらくエパロフのアホは改良しないで重いままのあの鎧を着けて動き回ったせいで床を破壊したんだろう。だが俺はそんなことにはならぬ。さあ、ジョウジ、どう戦う？」

オルネスは長々と話していたが、讓治はろくに聞いていなかった。「御託ならべてないでさっさと始めようぜ。それともビビってんの

か？」

讓治が剣を構えながらオルネスを挑発する。

「なっ！？ この俺がビビってるだど？ そんなことは断じてない！」

オルネスは讓治の予想外の言葉に明らかに動揺していた。だがすぐに冷静さを取り戻すと、斧を構えなおして讓治に向かっていく。

「うわっ！ あっぶね！ リーチがあまりにも違うから油断したら一瞬で真っ二つだな。なら、これでどうだ！」

讓治がバックステップで斧のリーチから離れつつ、剣で斧の柄の部分を狙った。

キーン！

一瞬、金属がぶつかる甲高い音が響いたが、すぐに止み、斧の刃が落ちるズウンという大きな音がした。

「これで自慢の武器はなくなったな。降伏するなら今のうちだ」

讓治が自分の剣・バゼラードをオルネスの首に突きつけてそう告げる。

「これで勝ったつもりか？ だとしたらまだまだ甘いな。斧よ、再生しろ！」

オルネスは不敵に笑うと、そう叫んだ。と、真っ二つになった斧の柄が光り、刃の部分が復活した。

「なっ！？」

讓治は驚きの声をあげると、すぐにバックステップで間合いをとった。

「この鎧戦斧バックスマイルは使用者オレが闘志を失わない限り何度でも再生する。ジョウジ、貴様に勝ち目はない！」

オルネスはそう言うのと復活した斧を持ち上げ、構えた。

「なるほどな、だけどそっちこそまだ勝った気になるのは早いぜ。

さあ、第2ラウンドだ！」

讓治はそう言うのと、バゼラードを構えて突撃した。

「ただ突っ込んでくるだけとはな。戦斧のサビにしてくれろ！」

オルネスも斧を構えて譲治を待ち受ける。

「ただ突っ込むだけ？ そんな自殺行為するわけないだろう」

譲治はニヤリと笑うと、床を蹴り、右へ左へ素早く移動を始めた。「いくら鎧が軽量化されていてもこのスピードにはついてこれないだろう」

譲治は当てずっぽうに斧を振るい始めたオルネスの攻撃を軽く避けると、再び斧の柄を真つ二つにした。

「時間をおくと再生するからな、悪いがこれで終わりだ。さらばだ、オルネス！」

譲治は最後にそう言つと、オルネスの首をはねた。

主を失つた斧の残骸は二度と再生することはなかった。

「よし、2人に追いつくでしょう。たぶんそろそろ最上階だな」

譲治はバゼラードを消すと、6階に続く階段を上がつていった。

少し時間は戻って、先に上に上がつていった聖たちは……

「最上階みたいだな」

「そうみたいね」

6階の敵を聖の空手と翔子の鉄球で蹴散らし、2人は7階にたどり着いていた。

「こういうデカイ扉の先にはボスが待ちかまえてるつてのが王道だよな」

「ええ、まず間違いないわね。でもここでグダグダしても仕方ないから行きましょう」

翔子がそう言つて2人は扉を開けて中に入つていった。

「やっと来たか、遅かったな。地球人レジスタンス、3人目の戦士よ」

オルネスを倒した譲治が最上階まで駆け上がり、扉を開けると、聖と翔子が傷ついて倒れていた。

「聖！ 翔子！ しっかりしろ！」

譲治が呼びかけると、聖が目を開け、

「譲治……気をつける……アイツは……下で戦ったどの敵よりも……数段強い……」

そこまで言ったところで力尽きて気絶した。

「ふっふっふ……2人がかりでこのワルブズにほとんどダメージを与えられないとは……我々ハルバート団が恐れていた旧政府特殊実験体の実力はこんなものだったか。3人目の戦士よ、それでも戦うのか？」

ワルブズと名乗った敵のボスは譲治にそう問いかけた。

「当たり前だ！ 聖と翔子のカタキ！ てめーは絶対叩つ斬る！」

譲治がそう闘志をみなぎらせた瞬間、ムツミが譲治の中で激しい光を放ち始めた。

「ジョー、第1の覚醒よ！」

10・譲治vsオルネス in 5階&そして最上階へ(後書き)

戦士どうしのガチンコ対決を制しつついに最上階へ!

しかし先に行った2人は敵のボス、ワルブズに倒されていた!?

果たして譲治はワルブズに対しどう立ち向かうのか?そして「第1の覚醒」とは?

11・最上階の決戦・前編（前書き）

先に最上階へ着いていた聖たちをあっさり倒した敵の大将・ワルブズ。

譲治との決戦が始まるつとす中、譲治とムツミに起こった変化とは？

11・最上階の決戦・前編

「ジョー、第1の覚醒が始まったわ!」

中からムツミの声が聞こえてきた。

「第1の覚醒?　なんだ、それ?」

讓治が首を傾げて聞き返すと、

「簡単に言えば戦闘能力アップね。もう少し経験積んでからだと思っただけ、ジョーの仲間を想うその気持ちで覚醒を早めたのよ」

ムツミはそう説明した。

「ふん、第1の覚醒だかなんだか知らんが、それをしたところでこの俺を倒すことはできまい!」

ワルブズはそう叫ぶと、足元に置いていた自分の武器を手にとった。

「よし、行くぞ、ムツミ!」

讓治もムツミの能力で武器を生成する。覚醒の効果が現れたのか、生成された武器はビシツと形の整った見事な日本刀だった。

「無理に本で読んだ歴史上の武器をイメージするより、レプリカとはいえ家にあつたこつちのほうがかなり楽だな……」

讓治は刀を鞘から抜き放ち、まっすぐに構えた。

「ジョウジ、貴様の武器はカタナか。資料で少し見ただけだがなかなか威力はあるらしいな。だが、我が戦斧・ウィンドバルディツシユに勝てると思うな! 『烈風斬』!」

ワルブズは自分の斧の名を叫ぶと、一歩も動かずに斧を振るつた。すると、刃の部分から風が巻き起こり、唸りをあげて讓治に襲いかかった。

「なっ!?!」

讓治は突然発生した風に対し、危険を感じてとっさに回避を試みたが、わずかに間に合わず身体のおちこちに切り傷ができていて血が流れていた。

「い、今はまさか、幻の魔宝石!?」

譲治がある程度大きなダメージを受けたことで一体化しているムツミの一体化状態が一時的に解かれてしまい、床に投げ出されたムツミが起き上がりながら今の技を繰り出したモノの正体を見抜く。

「なんだ、そのマホウセキってのは?」

譲治が顔面についた血を拭いながら誰にともなくたずねる。

「ジョー、魔宝石っていうのは、火星のどこかに眠っているとされるけど、古い文献にしか残っていない不思議な力を放つ宝石のことよ。風や炎など、いくつ種類があることもわかっていて、そのうちあれは風の魔宝石のようね」

ムツミはそう説明すると、再び譲治と一体化し、日本刀を生成した。

「ほう、よく知ってたな。その通り、コイツは風の魔宝石だ。ただの斧だった俺の武器を風の斬撃を放つ強力な武器に変えてくれた、素晴らしいアイテムだ。まだ我々ハルバート団もこの風の魔宝石ひとつしか発見してないほどの貴重品だ。そこで倒れてる貴様の仲間もこの風の斬撃に倒れた。そして残ったのは貴様だけ。貴様も仲間と同じ運命をたどるがいい!」

ワルブズは早口でまくしたてると、今度は十字に斧を振って風の斬撃を飛ばしてきた。

「何度も同じ技が通用すると思うなよ!」

譲治はそう言って十字型になって飛んでくる風の斬撃をかわし、ワルブズに接近して日本刀を振りかぶった。……が。

「おいおい、別に風の斬撃だけが俺の攻撃手段じゃないんだぜ?

なんせ普通に斧として扱ってもそれなりの攻撃力はあるんだからなあ」

ワルブズは譲治の刀を斧で受け止めると、そのまま力任せに譲治を弾き飛ばした。直後、ものすごい音とともに譲治が壁に激突、コンクリートの壁の一部が瓦礫がれきの山になった。

「いってえ……さすがに強いな……さーて、どうすっかな……」

讓治は瓦礫をどかしながら刀を杖代わりにして立ち上がると、そ
うつぶやいた。

「なかなかタフなようだな……次の攻撃で貴様を二度と立てないく
らいに打ちのめしてくれろ！」

11・最上階の決戦・前編（後書き）

ワルブズの斧にはなにやら特殊なアイテムがついていた。
はたして譲治はどう立ち向かうのか？

12・最上階の決戦・後編（前書き）

ワルブズの持つ風の魔宝石が猛威を振るう中、讓治はどう戦うのか？

12・最上階の決戦・後編

「うっ……」

譲治とワルブズの第2ラウンドが始まるうとしている中、翔子が目を覚ました。

「いたた……そっか、私、アイツにやられちゃったんだっけ……」
体を起こしながら翔子はつぶやきつつ、状況を把握するため辺りを見回し、互いに攻撃のタイミングをはかっている譲治とワルブズを見つけた。

「ジョー、ソイツの斧に気をつけ……つとつと……あら？」

翔子は譲治に注意を促すために立ち上がるうとしたが、そんなにすぐ動けるわけがなく、よろめいてしまった。と、懐の中から小さな石のようなものが転がり落ちた。

「これ、小さい頃から持つてるお護りの石……そういえば持つてきたんだっけ。よく見ると光ってる……？」

翔子が家を後にするときに懐に入れたのはこの石のようだった。

なぜかわずかに光を放っている。

「それは、魔宝石！ 小娘、なぜ貴様がそれを持つている？ どこで手に入れた？」

ワルブズが翔子の方にわずかに見える淡い光に気づき、接近しつつたずねた。

「これは子どもものころから持つてる私のお護りよ！ 魔宝石だからんだか知らないけどアンタには渡さないわ！」

翔子は石をワルブズに奪われる寸前に譲治の方へ放り投げた。

「よっ……と。翔子、これは？」

譲治が石をキャッチして翔子にたずねた。

「私が子どものころから持つてたお護りなんだけど、ここに来てから急に光を放ち始めたの。いま敵が魔^{ソイツ}宝石とかなんとか言っただけで、使えそうかしら？」

翔子は大声で譲治にそう話した。と、

「やかましい、余計なことをしゃべるな！」

ワルブズは怒鳴ると、翔子を再び気絶させた。

「ムツミ、これはその魔宝石とか言うモノなのか？」

譲治は石をつまみあげながらムツミにたずねる。

「ええ、これは間違いなく魔宝石よ。種類は：鋼^{はがね}ね。鋼の魔宝石だわ」

ムツミはきつぱりと魔宝石であることを断言し、種類も判別した。

「鋼？ それをオレが持つことでどんな効果があるんだ？」

譲治は魔宝石をいろんな角度から見ながらたずねる。

「もう効果は出てるわよ。ほら、そこ。ワルブズの攻撃を防ぐ鋼の盾。それがまずひとつ。あとは金属製の武器の攻撃力上昇。文献で読んだ限り効果はその二つってところね」

ムツミはいつの間にか目の前に出現していた壁を指しながらそう言った。

「くそっ！ 邪魔くさい壁など作りおって！」

壁の向こうではワルブズが鋼の壁を打ち壊そうと烈風斬を放った。直接斧を打ち込んだりしていたが、鋼の盾はその全てを防いでいた。

「待たせたな、準備が整ったぜ」

タイミングを見計らって壁を一回消しつつ、譲治がワルブズにそう告げる。

「そうか、ならば俺の烈風斬に切り刻まれるがいい！」

ワルブズは予備動作なしで斧を振るい、烈風斬を放った。唸りをあげて風の刃が譲治に襲い掛かるが、

「わりいがその技はもう効かねえよ」

譲治は一言吐き捨てると、鋼の盾を作り出し、風の刃を無効化する。

「今度はこっちの番だ！ 鋼の魔宝石で強化されたオレの刀、“正宗^{むね}”のサビになれ！」

盾を消すと、讓治は自分の刀“正宗”を振りかぶり、ワルブズに斬りかかった。

「くっ！ さすがに攻撃動作時までは盾を作れまい！ 切り刻んでくれるわあっ！」

ワルブズは一瞬あわてたが、すぐ冷静さを取り戻し、刀を振りかぶっている讓治めがけて烈風斬を放った。

「はあっ！」

讓治は気合一閃、刀を振り下ろし、烈風斬を切り裂いた。

「バ、バカな……風を切り裂くとは……」

ワルブズはありえないとばかりにわなわたと震えていた。

「わりいな、これで終わりだ」

讓治は一言だけ勝利宣言をすると、ワルブズにトドメの一撃を与えた。

「くそ…無念…だ……」

ワルブズは最期にそう言い、息絶えた。そしてその手のひらから彼の持っていた風の魔宝石が転げ落ちた。

「さて、人質にされた人は……」

讓治は魔宝石を拾うと、聖たちを起こし、辺りを見回した。しかし、この階にはこの大部屋ひとつしか見つからず、どこかの部屋の鍵だけが見つかった。

「これはどこの鍵なんだ？ この階にはもう部屋がないし、ここまで上がってくる途中にも特に怪しい場所はない……だとすると、地下か？」

讓治がそうつぶやき、3人は階段を下っていった。

「普通に地下への階段があつたな……」

1階で聖がそう話した。床には3階で聖が戦ったエパロフの死体がいまだに突き刺さっていて、その近くにらせん状に階段が地下に向かって設置してあった。

「ジョー、聖、翔子！ 戦ったのはお前らだったのか！」

鍵を開けて人質のいる部屋に入った3人をそんな声が出迎えた。

「遼！ それにほかのみんなも無事だったか！」

「まあな。人質にされてはいたが最低限の待遇はあつたし、誰かがおれたちを助けるために戦ってるらしいことは見張りの連中の噂話とかで聞いてたから希望を失わずに済んだんだ」

遼と呼ばれた男 本名は島田しまだ 遼りょうという はそう話した。

かくして譲治たちはひとまず人質を救出し、ハルバート団から街を取り戻すことに成功したのだった。

12・最上階の決戦・後編（後書き）

翔子が持っていた鋼の魔宝石の力でワルブズを倒し、人質を奪還した譲治。

しかし、翔子はなぜ魔宝石を持っていたのか？

そして、火星を制圧しハルバート帝国を建国したダスティスが次に下した命令とは。

以下次話に続く！

13・帝国、動く(前書き)

讓治たちの勝利から少し後、火星では

PC推奨です。携帯だと毎回のことですが読みづらいかもしれません。ご了承ください。

13・帝国、動く

火星を制圧し、ハルバート帝国を建国して自ら皇帝となったダステイスは、次にどうするか考えていた。

「火星は制圧完了、地球も近いうちに制圧できるだろうから、残るは……月だな。おい、すぐに月を統治するクレアタム王国に大使を向かわせ、“ただちに無条件降伏しろ。さもなければ地球と同じ目に遭うことになる”と伝える」

ダステイスが側近にそう命じたとき、別の部下が慌ただしく玉座の間に入ってきた。

「こ、皇帝！ 地球侵略が失敗に終わったとの緊急連絡が入りました！ 生き残ったのは一般兵数名のみで、幹部は地球人のレジスタンスによつて全滅させられた模様です！」

「なんだと！？ そんなバカなことがあるか！」

ダステイスはそう怒鳴りつけた。

「恐れながら、信頼できる連絡かと。手紙での連絡と同時にこのような写真も送られてまいりました」

緊急連絡を伝えた部下は、そう話すと、ダステイスに手紙と写真を渡した。

「どれどれ……『我々侵略班は地球をほぼ制圧、最後に残った街で旧政府特殊実験体3体、そしてその契約者^{コントラクター}たる地球人3名と交戦、これに敗れた。その時はオルネス様たちも本気で戦っていたが、後にその街の生き残りの地球人を人質に取つてその実験体や地球人をおびき寄せ、再び戦闘状態に入る。しかしこの戦いで各幹部は連戦連敗、侵略班総隊長・ワルブズ様もレジスタンスのリーダー格の男によつて倒された。なお、ワルブズ様が皇帝から貸し与えられていた風の魔宝石はレジスタンスの手に落ちたようであります。……』だど？」

ダステイスは手紙を読み終わると、写真を手に取った。そこには、

各幹部の無様な死に方が写っていた。と、そこに早くもクレアタム王国に向かわせた大使が帰ってきた。

「報告します。クレアタムは我々ハルバート帝国を一つの惑星^{ほし}を治める国家として認めない、とのことで門前払いされました。皇帝、いかがいたしますか？」

単身クレアタムに無条件降伏をするように要求しに行つた大使はそう報告した。

「そうか、ご苦労だった。下がって休んでいて良いぞ」

ダステイスは大使をねぎらい、そう話した。

「さて、クレアタムがそういうつもりであれば、我々がとる手段はただひとつ。最低限の守備を残してクレアタムに総攻撃をかける。帝国空軍、陸軍を各一個中隊ずつ守備に当たらせ、残りの全軍はクレアタムに出撃準備をせよ！」

「はっ！」

ダステイスの命令に、その場にいた側近や軍の関係者たちが敬礼をして慌ただしく散っていった。

一方そのころ、クレアタム王国では。

「皆のもの、おそらく火星のテロ国家・ハルバート帝国が近いうちにわがクレアタムに攻め入ってくるだろう。こちらは守りに徹するのだ。兵力はハルバート側が15万、われらクレアタムが13万5千と、こちらがわずかに少ないが、攻め入るほうが勝つためには守りの何倍もの兵力が必要だと聞いたことがある。それと、ハルバートが精鋭部隊を派遣して地球に向かつていたらしいが、制圧に失敗したらしい。たった3人のレジスタンスに全滅させられたそうだ。そのレジスタンスを味方につけられれば我らの勝利はより確実なものになるだろう。そこでどこかの小隊に頼みたいのだが、彼らにこちらの戦力として加わってほしい、と説得に行ってもらいたい。誰

かないか？」

国王・バルククレア16世はハルバート帝国が攻めて来ることを伝え、軍関係者に守りにつくよう命じ、さらに別の小隊には地球に向かい、レジスタンスを味方につける交渉役を頼んだ。

「でしたら、私の小隊が地球のレジスタンスを担当しましょう」

一人の男がそう名乗りをあげた。

「おお、クロスか。よしわかった、地球のほうはおぬしに任せろ。

レジスタンスが拒否するようなら無理に説得しないでいいからこちらに戻ってきてかまわない。それでは、頼んだぞ」

「はっ、了解しました」

クロス小隊長は国王の命令に短い返事を返すと、自分の部下数名を連れ、地球に向けて飛びたった。

「他のものは全軍をもってハルバート帝国軍を迎え撃つのだ！地球のレジスタンスが加わってくれることを信じ、この国を、母なる月の大地を守り抜くのだ！」

「おーっ！」

国王がゲキを飛ばし、軍の兵士たちが雄叫びをあげたのち、配置に着くのだった。

13・帝国、動く(後書き)

地球制圧に失敗したハルバート帝国は次の狙いを月のクレアタム王国に定めた。

帝国 vs 王国の宇宙戦争の火蓋が切って落とされようとしている中、譲治たちを味方に引き入れようとするクレアタムのクロス小隊長。果たしてこの戦争の行方はどうなっていくのか。

ここから先、更新ペースが変わります。2日に1話を最低限度として守りますが、作者の調子だけで予定日じゃなくても更新するかもしれません。お楽しみに……

14・帝国vs王国、開戦！（前書き）

無条件降伏を拒否した月のクレアタム王国に帝国の魔の手が迫る！
いざ開戦！

14・帝国vs王国、開戦！

「て、敵襲！ 帝国軍が攻めてきたぞ！」

「空軍第1防衛ライン、突破されました！ 空軍を第2防衛ラインまで退かせます！」

ハルバート帝国軍がクレアタム王国へ宣戦布告後、その領域へ攻め入ってから結構な時間が過ぎ、戦況は断然帝国有利、との報告が国王のもとに入った。

「国民は地下シェルターに避難するよう指示し、開発を進めていた超大型シェルターを発動させよ！ 少しでも時間を稼ぐのだ！」

国王・バルクレア16世は報告してきた軍の指揮官にそう指示を出した。

「はっ、了解しました」

軍の指揮官は敬礼をして、玉座の間を後にした。

その直後、月面上空で帝国軍と交戦していた王国空軍が次々に撤退を始めた。

帝国軍側はこれを降伏の意味と捉え、攻めこもうとした矢先、轟音とともに月面を巨大なシェルターが覆っていった。

これにより先頭きつて突っ込んでいった戦闘機が何機か閉じたシェルターに挟まれたり衝突して破壊された。

「くそ、防衛シェルターか！ こんなものを開発していたとは、クレアタムめ！ 少し様子を見る！ 全機退がれ！」

帝国軍突撃部隊司令官・ジャンククスはシェルターに向けて何発か銃弾を撃ち込んだがびくともしないことを確認すると、シェルターに衝突せずに済んだ生き残りの機体をいったん退かせることにした。

これによりしばらく戦況は膠着状態に入ることとなった。

そのころ、地球へ向かったクレアタム王国空軍クロス小隊は「情報によるとこのあたりなんだが……」

クロスは出発直前に国王から「目標の人物は地球の象徴たる蒼き海に浮かぶ弓状列島にいる」との情報をもらっていて、それを基に探していた。

「隊長！ 向こうのほうに生き延びたと思われる地球人が大勢集っています。何らかの情報を得られるかもしれません」

クロスから離れて別の方向を探していた、小隊の兵士のひとりがクロスにそう報告した。

「そうか、ではそちらへ向かうとしよう。案内してくれ」
クロスはその兵士の案内を受けて歩き出すのだった。

はたまたそのころ、讓治たちは「とりあえずここを拠点にしよう」

讓治たちがレジスタンスを正式に結成するにあたって、本拠地に選んだのはかつて通っていた高校だった。

「そうだな、ここなら雨風のげるし、高いところからあたり一帯を見渡すこともできるしな」

そう言ったのは、放送塔での戦いで人質として捕らわれ、解放後に仲間として加わった遼だった。遼は讓治たちのように実験体と契約していないので、メカに強いという特技を生かし、その辺の廃材からいろいろな戦闘用道具バトルアイテムを創っていた。

また、放送塔での戦いの後、讓治たちレジスタンスに加わったのは遼だけではなく、讓治たちの一年先輩で、高校卒業後、地球連邦空軍の最年少エースパイロットとして活躍していた永岡ながおか 彬あきひもいた。と、そこに付近の様子を見に行っていた翔子が戻ってきた。

「なんか妙な連中がここに向かってきてるわ。戦える人は念のため警戒態勢、それ以外は安全なところに避難してて」

その言葉に全員の緊張感が一気に高まった。

「翔子、そいつらは何人くらいだ？」

讓治がそうたずねると、

「約15人くらい、それほど大きな隊ではないみたいね。相手は少なくとも地球人ではないことはたしかよ。遠くから見たただけで、顔つきが私たちとは違いすぎたから」

翔子はそう話した。

「こないだやつつけたヤツらの仲間がもう来たのかな？ だけどそれにしても人数少ない気もするんだよな」

聖もそう言いながら、いつ戦闘になってもいいように警戒を強めていた。

「見えてきたな。って、白旗？」

相手の姿が見えてきたところで讓治たちは奇襲をかけようとしたしかし、相手が白旗を掲げていたのでひとまず奇襲を中止した。

「失礼、私はこの小隊を率いるクロスと言うものだが、ちょっと聞きたいことがあってね。このあたりについて最近ハルバート帝国の侵略軍を叩き潰した地球人のレジスタンスがいるらしいんだが、どこにいるか知らないかね？」

クロスは単刀直入にそうたずねた。

「あんたらはこの小隊なんだ？ ハルバートの仲間か？」

讓治が警戒心をあらわにそう問う。

「そうだな。それを名乗るのを忘れていた。我々は月を治めるクレアタム王国空軍、第八小隊だ。私は先ほど名乗った通り、この第八小隊を率いるクロスと言うものだ」

クロスは改めて自己紹介をした。

「じゃあ、ハルバートの仲間ではないと言うことか？」

讓治がさらに問うと、

「ああ、むしろ敵対していて今ごろはハルバートが我がクレアタムに攻め入っているところだろう」

クロスはそう答えた。

「そうか。それであんたらの質問だが、あんたらが探しているのは

オレたちだ。何の用だ？」

讓治はクロスにそう告げ、用件を話すように促した。

「おお、キミたちがそうなのか。ならば話は早い。単刀直入に言おう。いま我々クレアタムはハルバート帝国に攻め入られ、必死で防衛している状況だ。我が国王は一部とはいえ帝国軍を叩き潰したキミらの情報を聞いて、ぜひ仲間に加わって欲しいと願っておられる。我々と一緒に月へ来て帝国軍と戦ってはくれまいか？」

クロスは讓治たちにそう頼み込んだ。

「願ってもない申し出だな。オレたちはヤツらの放ったミサイルで親を失い、ヤツらへの復讐を誓った。敵を直接叩き潰せるなら喜んで行こう、なあみんな？」

讓治はそう言っ聖たちのほうを見る。

「ああ、まったくもってその通りだ。クロスさんといったか、俺たち五人、喜んでクレアタムに行こうじゃないか」

そう言ったのは、彬だった。

「そうか、来てくれるか。それじゃ、準備ができたならまたここに来てくれ」

クロスは讓治たちにそう告げると、船をここまで移動するために一度立ち去った。

「もしかしたらもう帰ってこれないかもしれない。それでもいいのか？」

クロスたちが立ち去ったあと、校舎内に戻った讓治はみんなにそう確認していた。

「今さらそんなこと言うなよ、ジョー。さっきお前も言っただろ？みんな親を失い、復讐のために戦ってるってさ。みんな同じだ。もう迷いはない。行こう、月へ、そして火星へ！」

彬のその言葉に残りの3人も無言で頷き、5人はクロスたちの船

に乗り込み、月を目指すのだった。

14・帝国vs王国、開戦！（後書き）

レジスタンスに新たな仲間も加わったところで、勧誘に来たクレア
タム王国軍のクロスとともに譲治たちレジスタンスは月面へ！
いざ行かん、帝国を倒すために！

15・動き出した戦況（前書き）

シエルターによって膠着状態じゅうちやくに入ったクレアタムと帝国の戦争。
この状態を打破するのは誰なのか？

15・動き出した戦況

月面を覆う超巨大シエルターのおかげでクレアタム軍は帝国軍の猛攻をひとまずシャットアウトすることに成功したが、帝国軍を撤兵させるには至っていないかった。

「ヤツら、何かこのシエルターを打ち破る策でもあるのだろうか……?」

クレアタム空軍の精鋭が集う第一小隊の隊長・シャルガー「ブロンは未だにシエルターの向こうに見える帝国軍の戦闘機を見上げながらつぶやいた。

一方、帝国軍突撃部隊のほうはというと……

「司令官どの、このままではらちがあきません。自分の機体があそこに突っ込んで風穴を開けますのでそこを総攻撃してください!」突撃部隊のうちの一機が司令官・ジャン「ヨークスに無線でそう告げて、死を覚悟した特攻を仕掛けようとした。

「待て、ヨハン。お前が特攻をかけてあのシエルターを確実に破壊できるか? それにお前にだってオレという家族がいるだろう。無駄死にだけはするな。これは命令だ」

ジャンは特攻をかけようとした実弟・ヨハンをそう説得し、特攻を中止させた。

「司令官どの、いや兄貴……了解であります!」

ヨハンは実兄・ジャンの言葉に感動し、涙声で返事をしていた。「全機に告ぐ。今我々は待機しているが、本隊のほうに現状を報告し、支援要請をすでに出している。もうすぐ到着するはずなのでそれまではくれぐれも無茶な行動を起こさないように。よいな?」

ジャンは無線ですう指示を出した。

「了解であります、司令官どの!」

そう返事が返ってきたすぐ後に別の通信が入った。

「待たせたな、ジャン。帝国空軍の精鋭部隊、ただいま到着だ」

「その声は、ウルトフか！」

「ああ、その通りだ。精鋭戦艦部隊司令官・ウルトフ「ガンズリイ」、支援要請を受けてここに参上した」

ウルトフと名乗った男はそう言うと、挨拶代わりにクレアタム軍のシエルターにミサイルを一発ぶつ放した。

「ほう、あのミサイルではシエルターにキズひとつつかないか。なかなか強力なシエルターのようだな」

改めてクレアタム軍のシエルターが強力だということがわかったが、ウルトフは予想の範囲内とばかりに冷静だった。

「ウルトフ、あのシエルターをぶつ壊せるのか？」

ジャンが無線でそうたずねると、

「ああ、任せとけ。すぐにでっかい風穴開けてやるよ」

ウルトフは自信満々にそう答えるのだった。

「びつくりさせやがって……帝国軍の連中、新手が来やがったか。

シャルガー隊長、こちらにもミサイル攻撃の準備を。あのシエルターの真の恐ろしさを思い知らせてやれ」

クレアタム軍総司令官・アムネス「シャルロットがシャルガーにそう指示を出した。」

「はっ、了解しました、総司令官どの」

シャルガーはアムネスに敬礼し、さらに部下に指示を出してミサイルの発射の手はずを整えた。

「撃てー！ー！ーっ！！」

アムネスの号令とともにミサイルが10発同時に打ち出された。

帝国軍はミサイルにすぐ気づいたが、「シエルターに引つかかるのに、クレアタムの連中はアホだな」と笑っていた。ところが、ミサイルはシエルターなど存在しないかのように飛び出し、帝国の艦隊に襲いかかった。

10発のうち、5発は撃墜が間に合った。しかし、残りの5発は艦隊のあちこちに着弾し、そのうち2発が着弾したヨハンの機体が大爆発を起こした。

「ヨハーンー!!」

ジャンは無線でヨハンの機体に呼びかけたが、彼から返事が返ってくることはなかった。

「敵機、一機撃墜を確認しました」

「ふっ、思い知ったか、帝国め。このシエルターは外側からの攻撃は完璧にガードし、内側からの攻撃は素通りさせるのだ」

アムネスは勝ち誇った顔をしていた。

そのころ、月の裏側では

「到着だ。とりあえず、国王に現在の戦況を聞くのと、キミらの紹介もしなくてはならないから私についてきてくれ」

クロス小隊と譲治たちレジスタンスを乗せた船が月に到着し、その足で一行は城に向かった。

「クロス小隊、任務を終えてただいま帰還いたしました」

「よくぞ無事に戻ってきた、クロス隊長。彼らがレジスタンスなのか？」

国王バル・クレア16世はクロスをねぎらい、後ろについてくる譲治たちに気づいた。

「ええ、その通りです。彼らは我々の頼みを快諾してくれました」
クロスはそう話し、譲治たちに前へ出るよう促した。

「お初にお目にかかります。我々レジスタンス、たった5名ですが帝国を倒すためこの場に参上いたしました。そこで緊張して固まってるのが本来のリーダー格・譲治、その左側が順に聖、翔子、遼、そして自分は元地球連邦空軍のパイロットをしていた彬と申します」
緊張のあまりガチガチになっている譲治に代わり、こういう場に

多少なりとも慣れている彬が全員の紹介をした。

「地球の若き勇敢な戦士たちよ、協力してくれること、感謝する。早速で申し訳ないのだが」

国王がそこまで言った瞬間、爆音が轟き、シエルターに守られてるはずの王宮が揺れた。

「王様！ 帝国の巨大ミサイルでシエルターが破壊されました！

帝国軍がどんどん攻め入ってきます！ このままでは間違いなく陸上戦に持ち込まれます」

「やはりまだ開発段階だったからな。仕方ない、レジスタンスの諸君。すまないが戦闘準備をしてほしい。いいかね？」

国王は譲治たちにそう話した。

「承知しました。俺は空軍へ、譲治、聖、翔子の3人は陸上戦に備えて待機、遼はメカニックとして全体の支援に回る。行くぞ！」

「おう！」

彬が年上らしくきてきぱきと全員に指示を出し、5人の戦士はそれぞれの戦いに向かうのだった。

「みんな、こんなところで死ぬなよ！ オレたちの最終目標はハルバートの連中をぶっ倒すことだからな！」

15・動き出した戦況（後書き）

帝国側の救援、戦艦部隊ウルトフ・ガンズリイの登場でシエルターは破壊され、帝国が波に乗ってしまった。

このままでは月面の戦いになるが、帝国軍を止められるのはもはや譲治たちしかないのか？

16・それぞれの戦い（前書き）

（前回までのあらすじ）

クレアタム軍の防衛シエルターが破られてしまい、譲治たちは空軍、陸軍、メカニック支援の3チームに分かれ戦いに臨むことになった。

16 . それぞれの戦い

「行け！ 国王バルクレア16世の首を取ればこの戦争は我らの勝利だ！」

クレアタム軍の防衛シエルターを打ち破った帝国軍は次々にクレアタム領内になだれ込み、空爆部隊と上陸しての地上戦部隊に分かれていた。

「地上の方は陸軍と譲治たちに任せて、俺たちは空爆を仕掛けてくる敵機を撃ち落としましょう！」

空軍に合流した杉は空軍の指揮官にそう進言した。

「うむ、さすがは元地球連邦のエースパイロットだ。諸君、聞いたな？ 我々空軍部隊はこれより敵機を撃墜していく。こうなつてしまった以上敵を全滅させなくては平和を取り戻せない。諸君の働きに期待している！」

空軍指揮官・ヴァイラス・ブナッチはそう部下を勇気づけた。

「全機、出撃せよ！」

杉を含めた空軍部隊は王宮の裏側にある空軍基地から一斉に発進した。

「10号機から全機へ、どうやら早速おいでなすつたようだ。だが相手は3機。こちらのほうが数が多いから三隊に分かれて敵を囲って撃墜するぞ！」

発進して間もなく、杉の乗る10号機が王宮周辺を集中的に空爆していた敵機を見つけ、ほかの機にそう指示した。

『1号機から9号機、了解！』

クレアタム空軍の他の面々が乗り込んでいる各機はそう応答し、3-3-4の三隊に分かれ、敵機を取り囲む作戦に打って出た。

帝国軍側1機に対しクレアタムは3機、4機で囲んでいるので、いとも簡単に撃墜することに成功した。

「本部より各機へ告ぐ、警戒状態を続行する。各機は2機ずつ散

開いて敵機に対する警戒を続けてくれ！」

無線で本部に敵機撃墜の報告を入れると、本部からそんな指示が返ってきた。

『了解！ 報告は逐一入れる！ 通信終わる』

10機は本部にそう報告を入れると、指示通り散開した。

一方、地上戦に備えてクレアタム陸軍と共に王宮周辺の警備に参加している譲治たちは

「さーで、来たな。聖、翔子、準備はいいな？ 向こうに接近されると守りづらくなるからこちらから仕掛ける。行くぞっ！」

視界に入るギリギリの場所に敵が現れたのを発見した譲治が2人にそう話しかけ、2人が頷いたのを確認すると、弾かれたように走り出した。

「我々はレジスタンスの3人を全力で援護しつつ、城を守る。いいな？」

陸軍指揮官・バレット・オルラーは走り出した譲治たちを見ると部下たちにそう指示した。

『了解であります！』

城の前に防御陣を敷いて守りを固める陸軍の若者たちはそう返事すると、城門を守るのに最低限必要な人員を残し、譲治たちとともに敵に向かって走り出した。

「オラオラ、死にたい奴だけかかってきやがれ！」

走りながら譲治は愛刀・正宗を生成し、宇宙空母から下ろした装甲車に乗って迫ってくる帝国兵とすれ違いざまに刀を振るった。帝国兵は譲治の攻撃を空振りだと笑い飛ばし、さらに城へ向けて突き進もうとした。ところが、その数秒後、装甲車は大破した。

「鋼の魔宝石の能力ちから、甘くみたな。さあ、これでもまだ撤退しないか！？」

譲治が声を張り上げ、帝国兵を威嚇する。しばらく動きを止めて様子を見ていた帝国兵だったが、そのうちの1台が急発進、急加速

で讓治に接近してきた。

「はっはー！ひき殺してやるぜ！」

帝国兵はそんなことを叫びながら讓治に数メートルの距離まで急接近し、直後に「ドンッ」という鈍い音がした。讓治の後方を進んでいた聖たち、そしてクレアタム陸軍、さらには帝国兵側も完璧に讓治をはね飛ばしたと思った。

聖たちがおそろおそろ目を開けると、讓治の前には鋼鉄の壁が出現しており、それにぶつかつた帝国軍の装甲車はそれが金属でできていたとは思えないほどひしゃげていて、その直後に爆発を起こした。

「この鋼鉄の盾は装甲車ごときじゃ破れないぜ。勝てないってことを理解したらさっさとクレアタムから撤退しやがれ！」

讓治がそう怒鳴ると、

「おのれ……ならば、これでどうだ！」

まだ無事な装甲車に乗つた一番後ろの帝国兵はそう言つと、一番後ろの装甲車だけに積んであつた小型ミサイルをぶつ放した。

「くっ、あんなものオレの鋼鉄の盾でも防ぎきれないぞ」

讓治をはじめその場にいる全員がミサイルの行方を見守るしかできなかつたが、次の瞬間、ミサイルは元来たほうへ戻つていき、発射点の装甲車に命中、大破させた。

「い、一体なにが起こつた？」

ミサイルの行方を見守つていた一同の前に現れたのは

「すまない、遅くなつた。原型を改造するのに時間がかかつちまつてな」

巨大ロボを操縦し、ミサイルを跳ね返したのは、メカニック・遼だつた。

「遼！助かつたぜ！ところでそのロボットは？」

讓治はナイスタイミングで現れた遼に礼を言いつつ、ロボットについて聞いてみた。

「クレアタム軍は有事に備えてこういつた兵器類をいろいろ作つて

いたんだ。で、コイツだけは開発が後少しのところまで頓挫していて、俺が最後の仕上げをやったら使えるようになったからこうして救援に駆けつけたってわけだ」

遼は別れたあとのことを説明すると、先頭に立って帝国兵を踏みつぶそうと迫り、帝国軍地上戦部隊を撤退させた。

「彬さんたち空軍のみんなも敵を撃退してみたけど、これでひとまず領内から帝国軍を追い出したな。帝国軍側の被害も相当なものだろうし、撤兵も近いだろう」

譲治はひと息つくくと、みんなとともに城内に戻るのだった。

16・それぞれの戦い（後書き）

攻め込んだ帝国軍は讓治たちの活躍によって大打撃を受けた。
果たしてこのまま撤兵してくれるのか？

17・帝国軍撤退と祝勝パーティー（前書き）

譲治たちの活躍で帝国軍に相当な被害を与えることが出来た。
そして

17・帝国軍撤退と祝勝パーティー

一度は勢いに乗ってクレアタム領内に攻め込んだ帝国軍だったが、予想をはるかに超えるクレアタム軍の強力な反撃に、領内から撤退せざるを得なかった。

「くそつ、クレアタムめ……ヤツらの兵器があそこまで強力なのは計算外だった。それに、空軍の航空機のうち1機に乗っていた男、それと陸軍で我らの地上戦部隊に大打撃を与えた男女3人組とミサイルをつかんで投げ返してきたロボットの操縦士の5人は顔つきからして地球人。しかも男女3人組のほうは少し前にワルブズ率いる侵略班が全滅したと報告があったときの映像にいた連中とそっくりだ。まさかクレアタム軍に協力してるとはな。とりあえず各機はそのまま待機せよ。ウルトフを失ったが、クレアタム軍は追い討ちをかけてくる様子はないので、今のうちに本部の作戦司令部にこれまでの報告と今後の方針を伺ってくる」

ジャンは親友のウルトフをはじめとする味方の半分近くを失ったところで退却を決め、火星と月の境界近くまで退いた後、味方各機に待機命令を出し、無線で作戦司令部に報告を入れた。

「こちら作戦司令部、了解した。このことを皇帝に報告してくれるのならばらく待機していてくれ。通信終わる」

司令部はそう言うと、通信を切った。

「はあ……作戦失敗の責任とる準備、しておかなくちゃな」

ジャンはため息をついてそうつぶやいた。と、無線のスイッチが入っていたのか、味方機から通信が入った。

「ジャン司令官、いや兄貴！ 責任とる必要があるのは兄貴だけじゃないだろ！ もし兄貴が責任を問われるんだったら俺も一緒に！」

無線でそう言ってきたのはジャンの実弟・ヨハンだった。

「ヨハン……一度に2人も家族を失ったらオヤジやオフク口が悲しむだろう？ 仮に処刑されるならば俺だけで十分だ」

ジャンは弟の申し出をきっぱりと断った。と、そこに作戦司令部から通信が入った。

「こちら作戦司令部、皇帝陛下からの指示を伝える。作戦を一から立て直す故、全隊に撤退命令を下す。司令官ジャンⅡヨークスの責任は問わず、引き続き指揮官職を全うするように、以上」

「ジャンⅡヨークス以下先行突撃部隊、了解した。これより撤退を始める」

ジャンはそう言うと、今度は味方各機に撤退命令を出し、帝国軍はクレアタムとの境界付近からすべて撤退した。

これはクレアタム側の監視もすぐに気づき、交代で休憩を取っていた軍の兵士たちや国王に報告した。

「そうか、わかった。皆のもの、この戦い、我らクレアタム王国の勝利だ。今夜はパーティーを開こう、レジスタンスの諸君もぜひ参加してくれ」

国王バルは兵士たちや譲治たちレジスタンスにそう告げたのだった。

そして、夜。クレアタム王国では帝国軍撃退を祝うパーティーが開かれていた。その席上で、

「しかし、帝国の装甲車を真つ二つにしたあの刀さばきはすごかったな」

陸軍指揮官・バレットⅡオルラーが譲治にそう話しかけてきた。「ああ、あれはコイツの力ですよ」

譲治はポケットから鋼の魔宝石を取り出し、バレットに見せた。

「これは……魔宝石？」

バレットは譲治にそうたずねた。

「ええ、よく知ってましたね。その通りですよ」

譲治は驚いた顔でバレットにそう話した。

「そりゃ知ってるさ。この国にもいくつかあるからな」
バレットはさらっとそんなことを言った。

「あれ？ 魔宝石は火星にしかないものだったんじゃない？」
翔子がそう疑問を投げかけると、

「その問いには私が答えよう。その昔、と言っても数十年前のこと
だかな、まだ我がクレアタムと火星共和国が仲がよかった頃、当時
の火星共和国大統領から友好の証として私の父親にあたる先代クレ
アタム国王・バル・クレア15世に贈られたものだ。貴重品だから
価値が高いものらしいとのことだな」

話に割って入ってきたのは、他の誰でもなく国王バル・クレア1
6世だった。

「国王さま、そのときに地球連邦にも魔宝石が贈られた記録とかは
残っていないですか？」

その話を聞いた翔子がそんなことを聞いてみた。

「ふむ。たしか国交に関する記録は城の書庫に残っていたと思うが、
火星共和国と地球連邦の関係まで記されているかはわからぬぞ。そ
れでもいいなら調べてみるといい」

国王バルは不思議そうな顔をしたがすぐにそう言ってくれた。

「翔子、どうしたんだ？」

讓治が書庫に向かう途中でそうたずねると、

「今はジョーが使ってる鋼の魔宝石、それは私が物心ついたころに
は家にあつたものなの。こないだの戦いまで一度として効果が現れ
たことはなかったけど、私のお守りになってたわ。もしかしたらな
んで私の家に魔宝石があつたのかわかるかもしれないのよ」

翔子がそう言ってるうちに、3人と案内してくれた兵士のひとり
は書庫に着いたのだった。

17・帝国軍撤退と祝勝パーティー（後書き）

翔子の持っていた鋼の魔宝石。なぜ翔子の家にあっただのか、その謎が解ける時が来たのだろうか？

18・書庫で調べ物（前書き）

書庫で調べ物を始めた譲治たち。

目当ての魔宝石に関する資料は見つかるのか？

18・書庫で調べ物

「国交に関する資料はこの棚に並んでいますので自由に探してもらって構いません。それでは、私はこれで」

讓治たちを書庫まで案内してくれた兵士は棚の場所を教えると、一礼して書庫から出ていった。

「で、翔子。何の資料を探せばいいんだ？」

膨大な資料が並ぶ棚の前に讓治がたずねる。

「王様が言つてた数十年前の月と火星と地球に関する記録、まあ、それが存在するかはわからないけど、もし見つければ魔宝石について何かわかるかもしれないの」

「わかった、どうやらここの資料は年代別に整理されてるみたいだからそれを辿つていけばなんとかなるかもな」

讓治はそう話し、聖や翔子とともに棚の間を歩き始めた。

「今年はクレアタム暦5658年と言つていたから、数十年前つつと、このあたりだな。クレアタム暦5628年、地球の西暦に直すと2005年。おっ、この年に火星から魔宝石が贈られているって書いてあるな」

讓治が資料の中から抜き出した本の一冊にそんな事が書いてあった。

「わざわざ地球の西暦まで書いてあるってことはもしかして当時から地球連邦と国交があったのかしら？」

翔子は讓治が読んだ部分からそう推測すると、讓治から資料を引たくつて文を目で追い始めた。

「その本はそれ以外に重要そうな事柄は書いてないように思えるんだが、って聞いてないな。んじゃ、オレはこつちの本を見てみるか」「じゃあ、僕はこれを」

譲治と聖も別の資料を手にとり、開いてみた。

それからしばらく3人は無言で資料の山と格闘していたが、
「ん？この資料、火星のことが中心に載ってるな。何々……」

譲治が何冊目かを開いた本は火星のことが載っており、その本の
最後の方には数十年前の事柄が載っていた。その内容はおおよそ次
の通りだった。

『火星共和暦6059年、共和国では月のクレアタム王国との友好
条約締結100周年を記念して魔宝石を贈り、両国の関係者が共和
国迎賓館でパーティーを開いた。予定通りにパーティーは進み、ク
レアタムに‘水’、‘鋼’、‘炎’、‘雷’の4種類の魔宝石が贈
られ、お開きにしようかというとき、当時火星共和国の副大統領の
地位にあったジュン＝マクノスが突如として反乱を起こし、副大統
領の地位を辞任すると同時にクレアタムに贈られるはずだった魔宝
石のうちのひとつ、鋼の魔宝石を奪って小型船で逃亡した。結局ク
レアタムには奪われた‘鋼’の代わりに‘氷’を贈ることでもま
ったが、逃亡したジュン＝マクノスの行方はいかにわからなかった』
譲治がその本の内容を読んでいると、翔子が反応した。

「ジョー、いま反乱を起こした人の名前、なんて言った？」

「ん？ えーと、ジュン＝マクノスって書いてあるな。そんでもっ
て奪ったのは鋼の魔宝石。行方はわからず、こんなところだな」

譲治が重要そうな情報をピックアップして翔子に伝える。

「私の父親の名前、牧野まの 淳じゅんって言うんだけど、偶然にしては似す
ぎじゃないかしら？」

翔子が気になっていたのは魔宝石の出どころだったが、調べてみ
ると翔子の出生にも秘密がありそうだった。

「よし、数十年前のことを他の人にも聞いてみよう。翔子、親父さ
んの写真とかは持ってないか？」

譲治はそう言うと資料を一度棚に戻しはじめた。

「一応形見として持つてるわよ」

「よし、じゃあ行ってみよう」

3人は書庫を出て年長者を探し始めた。

何人かに写真を見せながら話を聞いていくと、やはり翔子の疑問は当たっていたらしい。つまり、翔子の父親、牧野 淳は火星から逃亡してきたジュン・マクノスと同一人物なのだった。

「これで私の家に魔宝石があつた訳がわかつたわ。まさか父さんが火星の人で、しかも反乱を起こして地球に逃亡してきた人だったなんてね……」

自分の親が火星人だった事実には翔子は複雑な表情になっていたが、「翔子、たとえ親が火星出身の反逆者だろうと、お前はオレたちの友達だし、かけがえのない仲間だ。それに、お前の親父さんは共和制時代の人。オレたちが復讐を誓った帝国とは違うだろ？ さあ、帝国軍が態勢を立て直してまたここへ攻めてくる前にこっちから帝国に乗り込もう！ 帝国軍を元から絶つことが帝国に殺された地球の大人たちに対して唯一オレたちができることだ」

讓治が翔子を励まし、横で聖も頷いていた。

「そうね。私たちは帝国に親を殺され復讐を誓った。行きましょう、帝国に復讐し、正義の鉄槌を下すために！」

翔子の目に再び闘志がよみがえった。と、そこに、

「おっと、俺たちを忘れてもらっちゃ困るぜ」

「そうそう、親の命を奪った帝国に復讐したいのはお前ら3人だけじゃない。さあ、行こうぜ！」

国王から今回の礼として宇宙船を一隻と、かつてクレアタムに贈られた魔宝石のうち‘水’と‘炎’をもらうことができ、船に向かった3人は、置いていかれないように通路の途中で待っていた彬と遼を加え、一路最終目的地・火星のハルバート帝国に向けてクレアタム王国を後にしたのだった。

18・書庫で調べ物（後書き）

ついに明らかになった翔子の家にあった魔宝石の秘密。

そして5人は決戦の地・ハルバート帝国へ向かう。

そこで待ち受けているものとは？

19 火星到着、研究所へ（前書き）

ついに最終目的地、火星に到着しようとしている譲治たち。
最後の激戦が幕を開けようとしていた。

19 火星到着、研究所へ

クレアタムを出発してから約3日。一行は目的地・ハルバート帝国に近づいていた。

「どの辺に着陸したら安全なんだろうな？ 下手なところに着陸して船から降りたら敵に囲まれてました、じゃシャレにならないぜ」
船を操縦する杉が意見を求めるように話しかけた。

「えっと、今いる場所から見えるあの大きな建物がたぶん敵の本拠地・帝国城だと思うの。それとここから北に行つたところに私たちの旅立ちの場所になつた研究所があつて、そこなら船を安全に着陸させ、隠すことも可能だと思うわ」

そう言つたのは、ムツミだった。今は戦闘中ではないので譲治とは分離している。ムツミが指をさした東側には妙に大きく、存在感の固まりのような城がそびえ立っていた。

「よし、他に安全そうな場所がない以上、それに賭けてみるしかないな」

杉は船の進路を北に向けた。

「研究所はこのあたりだったと思うけど……」

帝国城からだいぶん離れたところでムツミやヒフミ、ゴウシが外を探し始めた。

「あたり一面瓦礫の山だな……アキラ、このあたりに船を降ろしてくれないか？」

ゴウシが杉にそう頼み、杉は「わかつた」と言つと船を着陸させた。

「やっぱりすでに研究所は破壊されてたか……」

ゴウシは足元に落ちていた「火星政府特殊実験体研究所」と書かれたプレートを拾い上げてそうつぶやいた。

「みんな、ここになにかあるぞ！」

研究所の建物があったあたりを歩きまわっていた聖が何か気づいてみんなを呼んだ。その声にみんなが集まってくると、そこにあつたのは……

「地下への……入り口？」

翔子がそれに気づいてそう言った。

「とりあえず、行ってみよう。研究に関する隠された情報が見つかるかもしれない」

譲治は地下への入り口らしき金属製の扉を開け、ハシゴを下りていき、聖たちもそれに続いてハシゴを下りていった。

全員がハシゴを下りてすぐ、

「誰だ、お前たちは……帝国の手の者か？」

暗闇の中から聞こえてきた声に譲治たちが声のしたほうを見ると、おそらく護身用と思われる短刀を構えた白髪の男が出てきた。

「待て、オレたちは」

「博士！ 私です、623号です！」

譲治が何か言いかけたのを遮り、ムツミが譲治から分離して男に名乗り出る。それに合わせるかのようにヒフミとゴウシも分離して前に出た。

「お前たちか！ とすると契約者コントラクターを見つけ、地球を救えたんだな」
博士と呼ばれた男もムツミたちに気づき、構えていた短刀を下げた。

「いえ、まだ完全には救ってません。帝国を壊滅させてこそ真の平和と彼らの復讐は実ると思い、ここまでやってきました」

ムツミはそう話した。

「そうか、とにかく奥へ行こう。ここはまだ帝国にも気づかれてない反帝国派のアジトだ。おっと、自己紹介が遅れたね。私は元研究者のテリエス「モントルード」だ、地球と火星の未来は君らに託された。帝国軍を倒してくれ」

テリエスは歩きだしたところで振り向いてそう自己紹介し、譲治

たちも簡単に名前を名乗りつつ、アジトの奥へと向かうのだった。

アジトの奥に着いた一行を迎えてくれたのは

「テリエス、彼らは何者だ……ってそういうことか。」

「ああ、察しの通りだ、カルー部長」

テリエスがそう頷くと、

「実験体の諸君、よく無事で帰ってきた。そして地球人の諸君、初めましてだな。私は研究所の所長だったカルーⅡヴァンドライトと言うものだ」

カルーが自己紹介を済ませたところで、

「カルー君、テリエス君、彼らは？ おや？ そのお嬢さんは誰かに似ているな……」

「ダツジョさん、彼らは地球に向かわせた実験体とその契約者です」
奥のほうからまた1人別の男が現れ、テリエスがそう説明した。

「ダツジョって、共和制時代の大統領！？」

テリエスが呼んだ男の名に真つ先に反応したのは彬だった。

「そのとおり、私は元大統領、ダツジョⅡバウンスだ。もつとも、帝国のせいではこうして潜伏生活だがね」

ダツジョは忌々しげに話した。

「でも君たちなら火星を救えるかもしれないんだな。名前を教えてくださいませんか？」

わずかに表情をやわらげてダツジョはそうたずねた。

「元地球連邦空軍のパイロット、彬です」

「メカニック、遼です」

「実験体623号の契約者、讓治です」

「同じく実験体123号の契約者、聖です」

「同じく実験体504号の契約者、翔子です」

5人が自己紹介を終えると、

「翔子、と言ったか。ちよつと気になるんだが、親の名前は？」

ダツジョが翔子に聞いてきた。

「牧野 淳、いや、ジュンⅡマクノスって言った方がわかりやすい

ですかね」

翔子がクレアタムの書庫で知った親のことを答えると、

「やはり、ジュンの子供か。彼は私がまだ大統領書記官だったときに副大統領を務め、そして逃亡した。地球に行ったということも
う……」

「ええ、帝国の攻撃で命を落としました。私が真実を知ったのはクレアタム王国にいたときですけど」

ダッジョと翔子は翔子の父親、ジュンのことでいろいろ話していたが、

「とりあえず、帝国城へ攻め込むにはどうしたらいい？」

譲治がそうテリエスにたずねたことで場の空気が一気に切り替わった。

19・火星到着、研究所へ（後書き）

いよいよ最後の戦いへ向けて気持ちを切り替えて潜入作戦を執行しようとする譲治たち。

果たして無事に帝国城へ乗り込み敵を倒すことは出来るのか？

20・侵入作戦開始

「帝国城に侵入する方法を教えてください」

讓治がテリエスにそう頼むと、テリエスは一行をアジトの奥へ案内し、

「我々も独自に帝国城へ潜入するために準備を進めていたところだ。ここから帝国城まで地下にトンネルが掘ってある。そこを進めばおそらく敵に気づかれずに潜入できるだろう。あとは帝国のボスである皇帝ダステイスを倒せばこの戦いを終わらせることができる」

テリエスが讓治たちに侵入ルートとしてトンネルを掘ったことを伝えた。

「ダステイス……そいつが今回の火星と月と地球を巻き込んだ戦いを引き起こし、オレたちの親を含む大人を死に追いやった張本人かさあ、侵入方法と倒すべき敵の名がわかったことだし、行こうか、みんな」

讓治はそうつぶやくと、聖たちにそう声をかけた。

「おいおい、ジョー。これから最後の戦いに向かうわけなんだからさ、『行くぜっ！』ってくらい気合い入れてくれよ……」

彬がため息をつきながら讓治にそう言った。

「……みんな、行くぜっ！」

「おっつ！」

讓治が頭をかきながら改めて言い直し、みんなの心をひとつにしてトンネルに向かおうとした、そのとき。凄まじい音とともにアジトの入り口のフタが爆破され、そろそろと帝国兵がなだれ込んだ。きた。

「ジョウジ！ ここは我々で食い止めるから、早く先へ進むんだ！
テリエスとカルーがいつの間にか武器を構えて帝国兵と対峙しつつ、讓治たちに向かってそう叫ぶ。

「テリエスさん！ カルーさん！ すいません、後を頼みます！」

讓治たちはテリエスたちにそう叫ぶと、後ろを振り返ることなくトンネルの中へ進んでいった。

「さて、レジスタンスの諸君、覚悟はいいかな？」

帝国兵の先頭にいた指揮官らしき男がそうテリエスたちに話しかけた。

「ふっ、本当に覚悟を決めなくちゃならないのはどちらかな？ 皇帝のイヌどもめ。我らは地球に送らなかつた実験体と契約し戦闘能力を得ている。その辺の雑魚には負けはしない！」

カルーがそう切り返す。テリエスは三日月型の刃の部分が光でできている斧「クレセントアックス」を、カルーはやはり刃が光でできている長い槍「パルチザン」をそれぞれ生成していた。

「行くぞ、テリエス！」

「おう、カルー！」

2人はその言葉とともに帝国兵に斬りかかっていった。

「あの2人、大丈夫だろうか……」

トンネルを走りながら讓治がそうつぶやく。

「ジョー、心配は無用だろう。あの2人の持っていた武器はジョーたちと同じ感じがした。ただの兵士なら問題なく勝てるだろうな」

彬がそう話し、一行はさらに駆けていくのだった。

「ちっ、数が多いな……テリエス、大丈夫か？」

「心配は無用だ、カルー。ちょっと疲れただけだ」

2人の活躍によって帝国兵の数はみるみるうちに減っていったが、元の数が多かったこともあり、戦うテリエスとカルーにも疲れが見え始めた。

「さすがだな、実験体の力は。だが、それもここまでだ。最近発見され皇帝に献上された新たな魔宝石の力、今こそ開放する！」

指揮官は軍服の内ポケットに入れていた小さな石を取り出すと、強く握りしめた。

「……！」

直後、猛烈な吹雪がテリエスたちを襲った。とっさに避けて直撃は免れたが、若い研究員がとぼつちりで吹雪の直撃を受けてしまい、研究員は一瞬で全身氷漬けになり、砕け散った。

「おのれ、よくもやつてくれたな！」

若い研究員の死にカルーが激昂した。

「ふっ、うまくかわしたか。だが次はお前らがあなる番だ。くらえ！」

指揮官が氷の魔宝石を握りしめ、再び吹雪がカルーたちを襲う。

今度は避けきれないと判断した2人は、盾を生成し防御する。

「今度はこちらから行くぞ！　くらえ！」

武器と盾を両方構えたまま2人が指揮官に同時に攻撃を仕掛けた。
「ガキーン！」

2人の攻撃は指揮官の持っていた氷の魔宝石にヒットし、少しずつつビビが入り始めた。

「おのれ、完全に砕ける前に貴様等をしとめてくれる！」

指揮官はそう叫ぶと魔宝石を握りしめた。だが、壊れかけの魔宝石はその瞬間、破裂した。

「……！！！」

魔宝石の破裂による衝撃で指揮官はもちろん、周囲に残っていた兵士、そしてカルーたちをも巻き込み、研究所跡地の地下アジトは崩壊した。

「いまの爆発音はなんだ？　まさか……！」

走り続けていた譲治が爆発音に気づいて足を止める。

「ジョー、俺が見てこよう。みんなは先に帝国城へ向かってくれ」

彬はそう言っていると来た道を戻り始めた。だが、すぐに譲治たちと
ころに戻ってくると、叫んだ。

「ヤバい！ さっきの爆発の衝撃でトンネルの崩落が始まっている！
走れ！」

20・侵入作戦開始（後書き）

トンネルを進み帝国城は目前にした譲治たち。だがテリエスたちの戦いの余波でトンネルの崩落が始まっていた。譲治たちは無事に帝国城へたどり着けるのか？そして爆発に巻き込まれたテリエスたちは？

21・帝国城その1 いざ侵入！（前書き）

テリエスたちの戦闘によってトンネルが崩れ始めた！
急げ、トンネルが完全に崩落する前に帝国城へ！

21・帝国城その1 いざ侵入！

「出口だ！」

後ろからどんどんとトンネルが崩れてくる中、讓治たちは走り、行き止まりに置かれたハシゴを上っていった。

「帝国城……の裏側みたいだね。うまい具合に見張りの帝国兵もいないことだし、進もう」

聖があたりを見回すと、すぐ後ろに巨大な外観の帝国城がそびえていた。

「ん？ ……あれは！？」

讓治が城の裏口にあたる扉を開こうとしたとき、視界の隅に何か光を放つものが映った。いったん扉から離れ、そっちへ向かってみると、地面に小さな石が落ちていた。

「ムツミ、こいつは……魔宝石か？」

讓治が拾い上げると、光は収まった。一体化してるムツミを呼んで見てもらうと、

「な、なんでこれがここにあるの……？」

ムツミはものすごく驚いた表情をした。

「ムツミ、どうした？」

讓治がたずねると、

「ジョー、これは魔宝石ね。しかも文献に残る中では最高クラスのレア物、光の魔宝石よ」

ムツミはそう答えた。

「そんなレア物がこんなところに落ちているとはな……よく今まで帝国兵に見つからなかったと思うぜ」

讓治がそう話したところで、

「これで私たちの手持ちの魔宝石は5つになったわ。これから始まる最後の戦いの前にそれぞれ1つずつ分けようと思うんだけど、どうかな？」

翔子がそう提案した。

「それもそうだな。今はオレが複数を手預かっているがメインで使っている『鋼』以外は効果が無いようだし、分けた方がいいな。で、どうやって分ける？」

譲治も了承し、今手に入れた『光』、翔子が昔から持っていた『鋼』、地球でワルブズを倒したときに手に入れた『風』、クレアタムでもらった『水』と『炎』、5つの魔宝石を置いた。

「まず『光』はリーダーっぽいし、ジョーが使うべきだわ。それと『鋼』は金属製の武器の威力を上げる効果があるから私がもらっていい？」

翔子が『光』と『鋼』を振り分けた。

「残っているのは『風』、『水』、『炎』の3つ。じゃあ僕は『炎』をもらおうよ。」

聖がそう言って『炎』に手を伸ばしても、特に反対意見は出なかった。

「遼、どっちにする？」

彬が遼にたずねる。

「おれたち2人はジョーたちのように実験体がないから武器はおれが製作した銃か、剣の中に銃が仕込まれてる銃剣トリガーブレイドになるんですけど、彬さんどっちにします？」

遼は逆に武器をどっちにするか聞いてきた。

「俺は連邦空軍所属だったが多少地上戦の訓練もこなしていた。そのとき使っていた銃剣を使わせてもらおうよ。」

彬はそう言うと遼から銃剣を受け取った。

「それじゃ、彬さんは『水』を使ってください。水を弾丸に変えることもできますし、水の刃で攻撃もできます。」

遼は自ら造った銃剣と魔宝石を合わせた戦い方を彬に教えた。

「そして、おれは風の弾丸を発射するこの銃で戦う！」

遼も残った武器と魔宝石を手にし、城の裏口の扉を開けると、5人は中へ入っていった。

「誰もいないな……」

「ええ、でもなんか逆に不気味だわ……」

城の中に入った5人は、開けた途端に帝国兵が襲ってくると思っ
ていたので少し拍子抜けしていた。

「まあ、敵がいないのに越したことはない。先に進もう」

彬がそう話し、5人は近くにあった階段を上がっていった。

「皇帝！ 地球でワルブズが倒し損ねたレジスタンスたちがこの城
まで到達した模様です！」

帝国軍総司令官・シリウス・クラウドが玉座の間に駆け込んでき
た。

「レジスタンスはすでに何個か魔宝石を手に入れているとの報告を
受けている。並の兵士じゃ役に立たないので下からさせて構わない。代
わりに各所に仕掛けさせてあるトラップのスイッチを入れるんだ」

ダステイスはシリウス総司令官にそう指示した。

「はっ、了解しました。失礼します！」

シリウスはそう言うと、部屋を出て城内を警備する一般兵を退却
させた。中には皇帝のためなら命を惜しまないと言って突撃しよう
とした兵士もいたが、シリウスが「皇帝の命令だ」と言ってそれを
止めた。

「やはりおかしい……なんで1人も敵と会わない？」

譲治が3階への階段を上りながらそうつぶやく。

「いいじゃないか、敵がいなければ皇帝まで体力を温存できる」

彬がそう譲治に話す。

「それもそうですね。おっ、3階だな」

譲治たちが階段を上りきり、3階にたどり着くと、扉が1つある
だけだったが、中で何やらドスン、ドスンと大きな音がしている。

「な、何の音？」

翔子が扉を少し開けて中をのぞくと、部屋の中央に沿って一定間隔で巨大なハンマーが床を叩き、ハンマーとハンマーの間は左右に揺れる振り子の鎌、さらにはハンマーの左右には壁が動いてそこにいたものをハンマーの真下に押し出すトラップと3つの複合トラップが仕掛けられていた。

「おいおい……こんなトラップ、どうやって抜ければいいんだよ…

…」

21・帝国城その1 いざ侵入！（後書き）

レアものの魔宝石を入手し、帝国城へ侵入した譲治たち。

一般兵は皇帝の命令で退却し、3階までやってきた譲治たちが出くわした複合トラップ！

果たしてこれをどうやって抜けるのか？

22・帝国城その2 牙を剥いたトラップ（前書き）

研究所跡地のアジトから延びたトンネルを抜け、裏口から帝国城に侵入した讓治たち。

皇帝の命令で一般兵が退却し、敵のいない状態の城内をひたすら上へ向かって突き進む一行を待ち受けていたのは

22・帝国城その2 牙を剥いたトラップ

「さて、このムチャクチャなトラップをどうやって抜けるか……」

3階の扉を開けた途端トラップに出くわした譲治たちは、部屋の中を見ながら途方に暮れていた。

「あつ、あそこにボタンらしきモノがあるぞ！　トラップの解除ボタンじゃないか？」

彬が部屋の真ん中付近にボタンらしきモノを見つけた。

「あそこまで全員で行くのは厳しいな。よし、おれが行く。みんなはトラップが停止したら来てくれ」

遼がそう言って部屋に入った。

「すまん、遼。気をつけてな」

譲治はそう遼の背中に声をかけた。

「気にするな。任せとけ。さて、と。まずは風の弾丸でボタンを押せないか試してみるか」

遼は風の魔宝石を埋め込んだ銃を構えると、ボタンのある壁めがけて撃った。

「ちつ、振り子が邪魔して当たらないか……仕方ない、直接押しに行くか」

遼は銃がダメなことを確認すると、銃と一緒に作っておいたホルダーにしまい、壁際でトラップの動きを観察した。

「よし、なるほどな。壁がせり出すのと、振り子が来るのは同じタイミングか。ならば……」

遼は壁がせり出しているときはしゃがんでそれをかわし、引っ込んだら一気に進むということを繰り返し、ボタンを押した。すると、せり出す壁は両側が半分ずつせり出した状態で、ハンマーが一番上、振り子は中央でそれぞれ停止した。

「よっしゃ、みんな行こうぜ！」

譲治はトラップが停止したことを確認すると、部屋に突入した。

「よし、先に進もう」

彬がそう言って歩き出し、一行が最後のハンマーの真下に来たとき、突然トラップが動き出し、ハンマーが一行に襲いかかった。

「えっ!?!」

予想外の出来事に誰もが動けず、諦めかけたとき。

「ぐっ! ジョー、行け! ここはおれが引き受けたから、早く!」

つぶされる寸前でハンマーを受け止めたのは、遼だった。

「遼! 待ってる、すぐあのスイッチを押してきてやる!」

譲治はそう言うと、トラップを駆け抜け、あっという間にスイッチにたどり着いた。

「どけ!」

スイッチを押してトラップを再始動させた帝国兵を一撃で斬り伏せると、譲治はスイッチを押そうとした。だが……

「ちくしょう、スイッチが壊れてやがる!」

譲治は叫びながら、ハンマーを破壊できないか試すため、遼のところまで再びトラップを駆け抜けた。

「うおりゃー!」

遼のところに戻るとすぐに刀を振り回してハンマーを破壊しようと試みるが、まったく歯がたたなかつた。

「ジョー、どいて!」

翔子が鉄球をぶん回し、ハンマーに攻撃した。しかし、少し揺れたものの、遼を助けるまでには至らなかつた。

「聖、翔子、彬さん、そしてジョー。もういい、先へ進んでくれ」

遼はわずかに首を振って4人にそう話した。

「バカやろ、諦めるな!」

譲治が怒鳴るが、

「お前らはおれ一人のためにこんなところで立ち止まってるべきじゃない。これをおれだと思って早く行け!」

遼は片手で踏ん張りながら自分の銃をホルダーごと外して譲治に託した。

「遼！ 諦めるな！」

4人がなんとかハンマーをどかそうと頑張るが、

「もう長くは持たない、正直おれが潰されるところなんか見られたくないしみんなだっけ見たくないだろ？ だから早く行ってくれ」

遼は微かに笑みを浮かべながら涙を浮かべる4人にそう話した。

「り、遼……ありがとう、そして助けられなくてすまない！」

譲治は涙を拭くと他の3人とともに4階へと続く階段を上がっていき、その直後、後ろのほうで「ドスン」という音が響いたのだった。

「遼……お前のぶんまで仇は討つぜ！」

22・帝国城その2 牙を剥いたトラップ（後書き）

残忍なトラップにはまり、仲間りょうを失ってしまった一行。

果たしてこの先に待ち受けるのは？

彼らはこれ以上仲間を失うことなく皇帝のところまでたどり着けるのだろうか？

23・帝国城その3 VS警備隊長ラスター（前書き）

トラップにはまり、仲間のためにその身を散らした遼の仇を討つため、讓治たちは改めて皇帝を討つ決意を固める。
行く先に待ち受けるのはいったい

23 帝国城その3 VS警備隊長ラスタ

遼を失ってしまった一行は、彼の仇討ちに燃えて4階にたどり着いた。

「何もない部屋だな……向こうに階段も見えるし、さっさと次へ進もう」

讓治がそう言っただけで階段の方へ歩き出し、階段の直前まで来た瞬間、突如後ろから声が聞こえた。

「おっと、その先へ進むのはこの俺様を倒してからにしろ」

その声に4人が振り向くと、部屋の中央にいつの間にか帝国兵が立っていた。ただ、着けている鎧が今までの雑魚が着けていた革製ではなく赤銅色になっていることから、多少なりともランクは上のようなのだ。

「ちっ、邪魔だな。そんなに死にたいなら遠慮なくやらしてもらおうぜ。遼の仇討ちだ！」

讓治がそう叫んで刀を抜いた瞬間、彼の身体が光に包まれた。

「この光、第1の覚醒のときと似てる……？」

讓治が自分を包む光にかつての覚醒のことを思い出していると、

「ジョー、第2の覚醒ね！さらなる攻撃力上昇と防御対策で鎧も生成できるはずよ」

ムツミがそう中から説明してくれた。

「鎧、か……」

そうつぶやいた讓治の身体には白銀に輝く鎧が装着されていた。

「ジョー、行くよ！わっ、こっちも！？」

「私も！？」

聖と翔子も武器を構えた瞬間讓治と同じように光に包まれた。

「2人とも、第1の覚醒をすっ飛ばして一気に第2の覚醒まで来てるよー！」

聖の中からヒフミが2人に声をかけた。

「そうなの？ それじゃ、ジョーと同じように防具が生成できるのね」

翔子はそう言うと、目を閉じ何かをイメージした。その直後、彼女の体はそれまで着ていた服より丈夫そうな布でできたドレスを着込んでいた。

「じゃあ、僕も」

それを見ていた聖も同じようにイメージをふくらませ、軽装の鎧を生成、装着した。

「待たせたな」

3人が鎧を生成している間、帝国兵は何もせず様子を見ていた。

「正々堂々が俺様のモットーなんでな。だが別にタイマンでやりあおうなどと言う気はない。全員でかかってくるがいい！ 警備隊長であるこのラスター」ソーケットが全員まとめて片づけてくれる！」
ラスターと名乗った帝国兵は、自分の武器・剣を鞘から抜きはなつた。しかし、

「柄だけで戦うつもりか？ なめやがって……」

譲治がそう吐き捨て、刀でラスターに斬りかかった。

「ふっ……」

ラスターはこの状況にも動じることなく、柄しか見えない剣を構え、叫んだ。

「出でよ、エネルギーブレード！」

その声に呼応するかのように剣の柄が光を放ち、その光がのびて刃を形どると譲治の攻撃を受け止めた。

「くっ！」

譲治は一旦刀を引いてラスターと間合いをとった。

「魔宝石か……ちっ、簡単には倒せそうにないな」

譲治が刀を構えたままそう吐き捨てる。

「ふっ、その通りだ。こいつは俺様の『煌』の魔宝石の能力だ」
ラスターがベラベラとしゃべりだす。と、

「『煌』？ そんな種類の魔宝石、聞いたことないわ」

ムツミがそう譲治の中からしゃべる。

「そりゃそうだろうな。文献にも載ってない新種のレアアイテムなんだからな」

ラスターはニヤニヤしながらそう言うと、

「もう終わりか？ ならばこの場で果てる！」

ラスターはエネルギーブレードの出力を上げ、刀身の長い大剣に形状を変えた上で譲治たちに襲いかかった。

「ぐっ！」

譲治が刀を水平に構えてラスターの大剣を受け止めたが、勢いに負けてしまい、後ろにいた聖と翔子を巻き込んで弾き飛ばされてしまった。

「ジョー！ 聖！ 翔子！」

ただ一人巻き込まれなかった杉は銃剣を構え、ラスターに攻撃をしかけた。

「貴様がエネルギーの刃ならこっちは水でコーティングして強化した刃だ！ 食らえ！」

そう叫びながら振るわれた杉の攻撃をラスターは受け止めたが、杉はニヤリと笑うと、手元の引き金を引いた。水の弾丸がラスターの剣を弾き、さらにラスター自身に何発も直撃した。

それでわずかにラスターが怯んだところでトドメとばかりに杉の剣がラスターを貫いた。

「終わったな。先へ進むとしよう」

杉はそうつぶやき、ラスターを貫いた剣を抜こうとしたそのとき、息絶えたと思っていたラスターが目を見開き、杉の剣の刃を掴んだ。「ククク……よくぞこの俺様を倒したな。だが、俺様はこう見えてかなりの寂しがり屋なのでな、一人で死ぬのはゴメンだぜ。いざと言うときのために俺様は身体に自爆用の爆弾をくりつけてある。

そのスイッチはもう起動した。あと5分で俺様とこの部屋はまとめて木っ端微塵に吹っ飛ぶだろうよ。アキラとかいったか、貴様を道連れにさせてもらっぜ！」

ラスターはそう話すと、掴んだ刃を自分に向けてさらに深く突き刺し、「ぐはっ」と言う一言を最期に今度こそ息絶えた。

「彬さん、行こう！ 爆発したらひとたまりもない！」

譲治たちが立ち上がり、彬を呼ぶ。

「すぐに行く！ だけど剣が抜けねえ！ もう少し粘らせてくれ！」

彬はラスターに突き刺さった銃剣を抜くのに時間がかかっていた。

爆発まで あと 2分

ラスターの爆弾が無機質な機械音でそう告げる。

「よし、抜け始めた！ ジョーたちは先に階段へ行つてくれ！」

彬は剣が抜け始めた手応えを感じていたが、

爆発まで あと 30秒 基準を超える振動によってタイマー

が短くなりました あと25秒で爆発します

爆弾の無機質な機械音がそう警告を発し、警報音までなりだした。

「くそっ、後少し……よし、抜けた！」

彬がようやく剣を抜いて階段へ走り出す頃には、爆発まで残り10秒を切っていた。

「間に合つて」

彬が階段と部屋を隔てる扉を開けようとした、そのとき。凄まじい爆発が起き、帝国城の4階が吹き飛んだ。4階と5階の間には譲治たちは爆発の影響はなかったが、彬が巻き込まれてしまった。

「彬さん！ いたら返事してください！」

譲治が呼びかけるが、誰の返事も帰ってこなかった。

「もしかしたら爆発で瓦礫に挟まれて動けないとかかもしれない、行ってみよう」

聖がそう言つて3人は爆発のあつた4階に戻つた。

「ひどいな……」

爆発の跡地は、爆心を含む半分以上が木っ端微塵に吹き飛び、それ以外も瓦礫に埋まつてると言つた具合だった。

「彬さん！ どこにいる!?」

瓦礫の下を片っ端からのぞいていくが、彬の姿は発見できない。

と、

「こ、これって……」

翔子が扉の近くの瓦礫のすき間から黒こげになった何かを拾い上げた。

「……認めたくはないが、これは彬さんのだ。水の魔宝石が砕けて能力を失ってるが、この銃剣はあの人のだ」

譲治が肩を落としてそうつぶやく。聖や翔子は涙を浮かべている。「行こう……テロにやられた地球の大人たち、そして遼や彬さんの弔い合戦だ。皇帝を討つぞ！」

譲治たちは焼けてボロボロになった彬の銃剣を扉の横に立てかけると、涙を拭いて階段を上がっていった。

23・帝国城その3 VS警備隊長ラスター（後書き）

ラスターを倒したものの、果たしても仲間を失ってしまった譲治たち。

果たしてこの戦いはどうなっていくのか

24・帝国城その4 ラストバトル前編(前書き)

倒れた仲間の想いを胸に譲治たちは階段を駆け上がる。
皇帝のいる玉座の間まではもうすぐ

24・帝国城その4 ラストバトル前編

「どうやら、最上階らしいね」

聖が目の前長い廊下と巨大な扉を見てつぶやく。

讓治たちはあれからさらに階段を駆け上がり、8階まで上がったところで階段が終わり、目の前に長い廊下があった。そしてその先には城の“お約束”とも言える巨大な扉があった。

「ああ、ようやくここまでたどり着いたんだな。遼や彬さんの仇、皇帝を討つ！ 行けぞ！」

讓治はそう言つと、巨大な扉の横にあるスイッチを押し扉を開けた。

「ようこそ、レジスタンスの諸君」

3人が部屋に突入するなり玉座にどっかりと腰かけた男がそう話します。

「てめえが皇帝か……」

讓治が怒りに震えた声で男に問うと、

「いかにも。私がこのハルバート帝国を治める皇帝・ダステイス・
ダークシヤマランスだ」

ダステイスは頷き、改めて自己紹介した。

「オレたちは地球を支配するために大人たちをウイルスで全滅させ、
遼や彬さんを殺した貴様を絶対に許さない！ 今この場で貴様を倒し、
平和を取り戻す！ 行けぞ！」

讓治はそう言いながら刀を抜く。それと同時に白銀の鎧が瞬時に装着される。聖と翔子も武器防具の準備を瞬時に済ませて構えを取っていた。

「ふつ、命知らずどもめ。我が『闇』の魔宝石の前に散るがいい！」
ダステイスはどこからともなく自らの武器である斧を取り出すと、
その柄に開けた穴にポケットから取り出した魔宝石をはめ込んだ。

「な、何だあれは！？ 魔宝石か！？」

自分たちが持つている明るい色合いの魔宝石とはあまりに色が違いすぎているダステイスの黒い魔宝石に、譲治たちはうろたえた。

「クツクツク……覚悟はできたか？ ゆくぞ！ ‘闇’よ、すべてを覆いつくせ！」

ダステイスはしゃべりながら斧を振り下ろした。すると、黒い魔宝石が光を吸収し、あたりを暗闇が覆っていった。

「なっ！？ おのれ、完全に見えなくなる前にケリをつける！ 食らえ！」

闇に覆われ視界がだんだん閉ざされる中、譲治が刀を振るい、聖がダステイスのふところにもぐりこみ、殴りつけ、さらに翔子が鉄球を振り回した。しかし、多少のダメージはあったもののダステイスを倒すまでには至らず、部屋は完全に闇に閉ざされた。

「今度はこちらから行くぞ！ 食らえ！」

闇の中からダステイスの声が聞こえた、次の瞬間。

「ぐはっ」

「うわっ」

「きゃあっ」

3人は完全に視界を封じられた状態でダステイスの攻撃を受け、八デにぶっ飛んだ。

「いてて……2人とも、無事か？」

譲治は暗闇の中にたずねる。

「な、なんとか……」

「ええ、大丈夫よ。そっちも問題はなさそうね」

完全な暗闇のせいで互いの姿は確認できないものの、声だけで無事を確認しあう3人だった。

「このままじゃやられるばかりだわ。ジョー、ヤツを倒すためには‘闇’と対極の存在であるあなたの‘光’の魔宝石を開放して闇を払う必要があるわ」

譲治の中からムツミがそう話す。

「開放するつつつても、どうすりゃいいんだ？　『鋼』の時のように力を込めても何も起こらないんだが」

讓治が困惑する。

「『光』はレアな魔宝石だから情報も少ないし、開放条件はわからないわ」

ムツミがため息とともにそう話す。

「クク……我が『闇』と対極の存在、『光』を持っていたとはな。だが、使いこなせないものを持っていても無意味だ！　諦めて闇の前に散ってしまえ！」

ダステイスは暗闇の中でも見えるようで、聖と翔子を斧の先端の槍でなぎはらった。

「うわあっ！」

「きゃあっ！」

讓治のすぐ横から2人の悲鳴が聞こえた。

「2人とも、大丈夫か！？」

讓治が暗闇に向かって叫ぶ。

「こんな状況で他人の心配とは余裕だな？」

ダステイスが再び槍の部分でなぎはらおうとし、反射的に讓治は声の方に刀を出した。だが、ここまでの激戦でボロボロになっていた刀では防ぎきれず、刀は折れ、讓治もぶっ飛ばされた。

「くっ……」

讓治はすぐに立ち上がったが、刀が折れていることに気づいた。

「ハハハハハ、折れた刀で何ができるといふのだ？　たとえ何をしようともこの闇から力を得ている私は倒せぬがな。仲間2人もすでに気絶、残りは貴様だけだ」

ダステイスが高笑いしながら讓治に告げる。

「まだ、オレは負けるわけには行かない！　地球で何もわからぬままウィルスにやられた大人たちのためにも、志半ばで倒れた仲間たちのためにも、オレは差し違えてでも貴様を倒す！」

讓治がそう言って折れた刀を構えたとき、まばゆい光が讓治を包

み込んだ。暗闇の中だけに今までの光よりまぶしく感じる。
「ジヨー、最終覚醒まで来たわよ！　そして、光の魔宝石も開放状
態になったわ！」

24・帝国城その4 ラストバトル前編（後書き）

皇帝の持つ闇の魔宝石の能力で危機に陥るも、ついに譲治&ムツミが完全覚醒し、光の魔宝石も開放された。

このまま皇帝を打ち破ることは出来るのか？

25・帝国城その5 ラストバトル後編(前書き)

ついに譲治と契約したムツミがその能力を100%覚醒させ、まばゆい光が譲治を包み込んでいった。
ラストバトル・後編スタート！

25・帝国城その5 ラストバトル後編

完全覚醒を果たした讓治の鎧は白銀から黄金に変化し、折れた刀も黄金の光を放つエネルギー状の刃として再生した。その2つの輝きが闇の魔宝石による漆黒の闇を少しづつ打ち消していき、さらにその輝きは気絶していた聖と翔子を目覚めさせた。

「ダステイス……覚悟しやがれ！」

黄金の輝きを放って闇を打ち消した讓治は、床を蹴ってダステイスとの間合いを詰めると、光の刃を振り下ろし、ダステイスを袈裟掛けに切り裂いた。

「見事だ……だが、よもやこれで終わりとは思ってしまい？」

斬られて鮮血を噴出しながらダステイスがそう言った途端、血は止まり、普通に立ち上がってきた。

「ちっ、さすがにボスだけあってそうやすやすとは倒せないか。だが、何度復活しようとオレはそのたびににお前を斬る！」

讓治は再び刀を構え、今度は縦に真つ二つに斬った。ダステイスの身体が左右に分かれてどさりと床に落ちた。

「終わっ……てない！？ コイツは不死身か？」

真つ二つに斬り落としたはずのダステイスの身体が闇に包まれたと思った次の瞬間、何事もなかったように再生し、立ち上がった。

「それなら、僕の炎の魔宝石で跡形も残らないほど燃やし尽くす！」

フルバーニングナックル
「食らえ、蒼炎拳！」

聖が拳に蒼い炎を発生させ、床を蹴ってダステイスに攻撃をしかけた。

「ぐおおおっ！」

直撃と同時にダステイスの身体を蒼い炎が包み込み、ダステイスは灰になって燃え尽きた。だが、

「クク……いくら倒したところで闇の力がある限り私は何度でも蘇る！」

灰が1カ所に集まり、またもダステイスは蘇った。

「くっそー……どうしたら……」

聖がそうつぶやいたとき、彼を光が包んだ。

「聖！ ようやくボクも完全覚醒したよ！ 炎の魔宝石の能力、開放だ！」

ヒフミが聖の中からそう声をかけた。

「行くぞ、新・炎拳！」

聖がそう叫んで繰り出した拳は、超高熱で蒼を超えて金色に輝きながらダステイスにヒットし、焼き尽くした灰さえ残さなかった。

「ぜえ……はあ……これが僕とヒフミの全力……だ……」

攻撃を放った聖はそう言うのと力尽きて床に倒れた。

「終わったのね。さあ、帰りましょう」

翔子が譲治と協力して聖に肩を貸しながら部屋を後にしようとしたとき。

「まだだ……まだ終わりではないぞ」

ダステイスを焼き尽くした場所で漆黒の闇が渦巻くと、肉体の再生が追いつかなかったのか、ガス状物質となったダステイスが闇の魔宝石をその中に持って浮いていた。

「ちっ、しぶといヤツだな……」

譲治が黄金の刀を振り下ろすが、刀は何の手応えもなくすり抜けた。翔子が鉄球を振り回しても同じことだった。

「ガスだから物理的な攻撃は通じないってか……？ やっかいなことになってきやがったな」

譲治がつぶやいたとき、ガス状ダステイスから闇の弾丸が撃ち出され、翔子に直撃した。

「きゃ……」

悲鳴をあげる余裕もなく、翔子は再び気絶した。

「ククク……これで残りは貴様ひとり、自慢のカタナとやらもこの状態の私には通じない。さあ、どうする？」

ダステイスが譲治を挑発する。

「くっ、光の魔宝石よ、力を貸してくれ！」

讓治の声で光の刃が輝きを取り戻し、ダステイスを切り裂く。しかしすぐに復活してしまう。

「どうしたらコイツを倒せるんだ……」

讓治が頭を抱える。

「ハ―ハツハツハ、闇の魔宝石は無敵だ！ 倒す方法など存在しない！」

ダステイスがガスを人型に変化させて高笑いをする。

「このまま諦めるしかないのか……？」

讓治が刀を投げ捨てかけたそのとき。

（諦めるな、ジョー！）

（お前が諦めたら太陽系のすべてが闇に包まれてしまうんだ！）

讓治の頭の中に仲間ともの声が聞こえてきた。

「そうだ、まだ勝負は終わってないんだ、オレが諦めたらそこで終わりなんだ！」

讓治の目に再び闘志が宿った。

（ヤツを倒すためには魔宝石を破壊しなくてはならない。ジョー、

俺たちの魂の力、使ってくれ！）

（世界の命運はジョー、お前の肩にかかっているんだ！ おれの力

も使ってくれ！）

城内で倒れた仲間とも、遼と彬の声が讓治を突き動かす。さらに、

（ムツミよ、我々の心はお前に預ける。皇帝を打ち破り、火星と地球に永遠の平和を！）

研究所の人々の魂も加わったことで讓治の刀には計6人ぶんの魂の力が集まり、その分だけ刀の輝きが増した。

「この城まで共に戦ってきた遼や彬さん、そしてオレとムツミを出会わせてくれた研究所の人々……かけがえのない仲間の想いはどんな敵にも負けやしない！ 覚悟しやがれ、ダステイス！」

讓治は刀を構え、ダステイスを斬った。

「バ、バカな……闇の魔宝石は無敵だったはず……だ。なぜ……」

ダステイスの持つ闇の魔宝石を真つ二つにかち割ると、少しずつガス状ダステイスが消滅し始めた。

「闇の魔宝石の無敵パワーよりもオレたちの友情が勝った、それだけのことだ」

讓治は刀をしまいながらそう吐き捨てる。

「私の負けだ……だがこれだけは覚えておけ、光あるところにならず闇もまたある……私が消えてもまたどこかで世界を、宇宙を征服しようとする輩が現れるだろう……ぐふっ」

ダステイスは捨て台詞を遺して完全に消滅したのだった。

25・帝国城その5 ラストバトル後編（後書き）

長き戦いの末、ついにダステイスを打ち破り、戦いは終わった。
次回で最終話となります。

エイプリルフルじゃないですよ？ マジで最終話です（笑

26・最終話　そして50年後（前書き）

皇帝を倒して平和を取り戻してから50年が過ぎ、世界はどうなったのか？

26・最終話　そして50年後

あれから50年の月日が流れ、地球はかつての姿を取り戻していた。あの戦争によって地球の人口は激減してしまったので、月のクレアタム王国や火星の新共和制国家からの移民を受け入れ、復興させたのだった。

そして、あの戦いを生き抜いた譲治は68歳になっていた。

「もうあれから50年……聖や翔子はもういない。あの戦いを語り継げるのもうわししかないのか……」

子供や孫とともに暮らす家でくつろぎながら、譲治はつぶやいた。聖は5年前に、翔子は2年前に病気で亡くなっていた。

「父さん、譲平たちが昔話を聞きたいってさ。いま大丈夫？」

もの思いにふけていた譲治のもとに、息子の譲一じょういち、孫の譲平じょうへいと譲太郎じょうたろうがやってきた。

「ああ、大丈夫だ。譲太郎、おいで」

譲治が体を起こし、譲太郎を呼んだ。

「うん！」

譲太郎はうれしそうにベッドの上の譲治に飛び乗った。

「じーちゃん、そんじゃ、話を聞かせてよ」

「わかったわかった、そうあわてなくてもちゃんと話すよ」

譲治は笑いながらそう譲平を制すと、話し始めた。

「そうだな……あれはまだわしが譲平くらいのとシだったところだな。今でこそ火星共和国や月のクレアタム王国の人が地球にいるのは当たり前のことだが、そのころはまだ存在を確認しただけで交流もなかったんだ」

「その辺は学校の歴史の授業でやったから、じーちゃんとテロリストの戦いを聞かせてよ。すごい戦いだったって授業でやったけど」
最初から話そうとしていた譲治を譲平が止めた。

「そうか。テロリストが打ち込んだミサイルで大人がすべて死んだ

後、火星の旧政府が最後の力を振り絞って送ってくれた3体の戦士とわしや仲間たちが出会い、戦いが始まったんだ。まず当時わしらが住んでいた街が敵にとつて唯一まだ征服してない街だったから、敵もかなりの人数が攻めてきて、街の生き残りを人質に取った。わしらはたつた3人で戦って街と人質を奪還し、仲間を5人に増やして宇宙に飛び出したんだよ。途中、テロリストが作った帝国に攻め込まれとつた月のクレアタム王国を助け、わしらは火星の帝国に乗り込んだ。激しい戦いの中で後から仲間に加わった2人が敵の罠でやられたが、わしらは帝国のトップを倒して平和を取り戻した。そして――

譲治はそこでいったん話を切ると、膝の上の譲太郎を下ろし、部屋の隅にある押し入れを開けた。そこには、あの戦いで使った刀「正宗」（戦いで折れているので残骸のみ）、役目を終えてただの石になった光の魔寶石、聖が使っていたグローブ、翔子の鉄球、遼の銃、彬の銃剣、さらにはみんなが使っていた各種魔寶石が入っていた。

「これらの武器のほとんどは火星の戦士能力によって作り出したものだが、戦いのあとも消えずに残った。石は戦いが終わってから一度もその力を発現していない。残りは仲間が使っていたものをわしが引き取ったものだ。話はこのくらいだな」

譲治は当時の戦いで実際に使った品々を見せて話を締めくくった。「じーちゃん、すつごいな。こんなすごい人が自分のじーちゃんだなんて、なんかうれしいや」

譲平は祖父の話に感動したのか涙を流していた。

「もうこの話をわし自身がすることはないだろうが、この話を後世に語り継いで二度とこんな悲しいことが起こらないようにしてほしいものだな……」

譲治はそつつぶやくと、散歩にでかけた。

その後、息子の譲一がその話をノンフィクション小説として発表し、一大ベストセラーになり、映画化もされた。そのタイトルは『ザ・リベンジャーズ〜復讐者たちの戦い〜』だったそうである。

しかし、その激動の歴史を生き抜いた譲治は映画の完成を見ることなく、病に倒れてしまいこの世を去るのだった。

完

26・最終話　そして50年後（後書き）

これにて完結となります。

自分にとって初めてのSFで読みづらい点多かったと思いますが、最後までお付き合いいただいた読者の方々に感謝しつつ終わりたいと思います。

本当にありがとうございました。

ちなみに、次回作はある程度固まりつつありますがまだ本決まりではないので少し時間が空くかもしれません。

それでは長くなりましたがまた次の作品でお会いしましょう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5366b/>

ザ・リベンジャーズ 復讐の闘い

2010年10月8日14時06分発行